
わたパン！

雪宮鉄馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたパン！

【Nコード】

N10180

【作者名】

雪宮鉄馬

【あらすじ】

原作／古山瞬

製作／雪宮鉄馬

中学生の木本芽衣は、ごく普通の女の子。ところが、ある日、一枚のパンツを穿いてしまった日から、彼女の運命は変わっていく。なんと、そのパンツは、ただのパンツではなかったのだ！

冗談交じりに書いた、戦記モノに、若干のコメディを加えた変な小説です！

い。

R15なので、十五歳未満の方は読まないようにしてください

1. 「あと、五分だけ……」（前書き）

（本編を読む前に、必ずこの前書きを読んでください）

『わたパン！』

原作／古山瞬

製作／雪宮鉄馬

本作のタイトルは、「わたしのパンツ！」略して「わたパン！」です。そのタイトルからも分かるとおり、十五歳未満の方は、読まないようにしてください。

また、本作は、わたしの知人でもある「古山瞬」が考えた原案をベースに、わたし「雪宮鉄馬」がアレンジして、執筆したものです。すべて、ジョークと冗談で書いた不真面目な小説です。色々和本気になさらないでください。

そのことを理解したうえで、お楽しみいただけたら幸いかと存じます……。

1. 「あと、五分だけ……」

薄暗くて、じめじめした地下室の扉。さび付いて赤茶けたそれには、小さな木の名札が取り付けてあり、毛筆の立派な名前が刻まれている。

『帝国陸軍第三技術研究室』

どうやら、ここは軍隊の研究らしい……。

「やった！ やったぞ！ この図面どおり、新兵器を作れば、戦争を終わらせることができるっ！」

物々しい部屋の名前とは違い、室内は六畳ほどの広さしかなく、資料のびっしりと収められた棚や、図面の用紙などが散らばっている、より狭く感じる。その部屋の中心、ちょうどテーブルの前で、一人の男が両手を高く天井に掲げて、喜びの声を上げていた。

「しかし、お堅い軍令部が、予算陳情に応じるか……。いやいや、そもそも兵隊どもが、この兵器の力を信じて、着用するかどうかの問題だ」

喜びもつかの間、男は両手をだらしなく下げて、溜息をつく。テーブルに広げられた一枚の出来立てはやほやの図面。右端には「新型兵器（仮称）」と記されており、複雑な数値と解説の中心には、逆三角形をした横ジマの何かが描かれていた。おおそ、兵器には見えないそれが、この男の開発した「新兵器」のようだ。

「いやいや、とにかく、水瀬大佐に報告しよう。予算や、兵隊への支給についての問題の解決は、その後だ！！」

男は頭を振って思いなおしたのか、ちらりと研究室の壁にかけられた古い掛け時計を見つめた。時刻は正午をすこし回ったところ。今から、軍令部に出かければ、夕方までには間に合う。そして、早ければ、来月の中ごろにもこの新型兵器は、戦場に現れることとなるだろう。特に、前線で苦戦を強いられている部隊に多く支給したいものだ。

と男は、頭の中でひとしきり計算すると、テーブルの上の図面を器用に、くるくると丸め、紐で縛った。そして、図面を片手に、深緑色の軍帽を被ると、詰襟を調え、研究室の電気を落として部屋を後にする。その足取りは、意気揚々と自信に満ち溢れていた。

だが、男は知らない。今日が、一九四五年八月十五日であることを。その日は、世に言う、第二次世界大戦・太平洋戦争の終戦の日であることを……。

木本芽衣^{きもとめい}は、朝に弱い。低血圧と言うヤツで、なかなかベッドから起きられない。「中学一年生になってもまだ、時間通り起きられないのか」と二つ年下の小学生の妹に笑われる始末だ。もちろん、本人も気にしているのだけど、やはり朝は体が重い。

その日も、目覚まし時計の音が部屋いっぱいに響き渡っても、芽衣は布団に包まっていた。それでなくても、カーテンの隙間からこぼれる春先の陽気は温かく、心地よいのだ。

「あと、五分だけ……」

「じゃないっ！ 起きなさい、芽衣。優衣^{ゆい}ちゃんは、もうとつくに学校行つたわよっ！！」

鬼か雷さまかと言うような怒号とともに、芽衣は布団をひっぺがされた。目の前には、仁王立ちの母の姿が。頭からは、によきによきと角が生えているみたいだった。

ちなみに、「優衣ちゃん」というのは、芽衣の妹だ。大人の前では利口で、減らず口だけは達者な十一歳。目下、芽衣の天敵、目の上のたんこぶだった。

「中学校は十五分で行けるから、大丈夫。もう少し寝るの……ねむねむ」

「寝るなつて、言ってるでしょうが！ 起きないと、来月のお小遣いなしだかねえ！」

十三歳の女の子にとって、それは死刑宣告にも等しい。芽衣は慌てて飛び起きる。

「い、今起きましたっ！」

「さっさと制服に着替えて、準備しなさい。それにしてもひどい寝癖ね」

母は娘の頭が、あちこちにぺんぺんとはねているのを、苦笑すると部屋から出て行った。しかし、芽衣は妹に比べて、今ひとつ信用に欠ける。また、布団にもぐりこみやしないかと、部屋の扉の向こうで、聞き耳を立てているに違いない、と悟った芽衣はそのそとベッドから降りた。

扉の向こうの母に分かるように、わざと大きな音を立てて部屋の隅のタンスを開き、それからパジャマを脱ぐ。十三歳の少女らしいスレンダーな体型は、芽衣のちよつとしたコンプレックスでもある。「まだまだ、これからっすよ。わたしだって、将来は美人になるはずだよ」

芽衣は、タンスの扉に据えつけられた、姿見に映る自分の姿に、一人で説得するように呟いた。想像するのは、従姉のお姉ちゃんいとこだ。大学生で、キャンパスでも騒がれるほどの「超」が付く美人。胸は大きく、腰はくびれ、スタイル抜群だ。一応、親戚だから自分にもその血が流れていると信じたい、と芽衣は思う。

実際、芽衣も、スレンダーな体を除けば、とても愛らしい顔をしている。なかなかの美少女なのだが、本人はそう思っていない。むしろ、憧れの従姉のようになりたいのだ。

そんなことを考えていると、部屋の外からイライラしたような母が「早くしなさい」と急ぎ立てる。

芽衣はあわてて制服を引っ張り出し、戸棚を開いて、替えの下着を探す。ところが、本来下着が並べられているはずのスペースには、あるはずのパンツが一枚もない。

「お母さん！ わたしのパンツ知らない？」

すこし大きな声で、扉の向こうの母に言うと、母は扉を開けて、バツの悪そうな顔をした。

「ごめん。あんたのパンツ、全部洗濯したんだった。忘れてたわ」

「ええっ！？　そんなあっ！」

「今、あんたが穿^はいてるそれでいいじゃない。下着なんて、誰かに見せるわけじゃないんだから」

と、母は下着姿の娘にすこし呆れ顔をする。芽衣が今、着用しているのは、うすいピンク色の可愛らしいパンツ。確かに、誰かに見せるわけではないけれど、芽衣は、毎朝下着を着替えて出かけるのが日課だった。その方が長い一日を気持ちよく過ごせる、というのが彼女の持論だ。

「それに、あんたのパンツなんて誰も見たくないわよ」

「うわ、ひどい。ちよっと、傷ついた……これでも、プライドってものがあるんですケド」

「なに、中学生が言ってるのよ。まったく、変なトコだけマセてくれちゃって。あたしの娘ながら、情けない。……ああ、そういえば、あたしが買ってあげた、パンツがあつたでしょ？　どうしても穿き替えたいっていうなら、それで我慢しなさい！」

母はそう言うのと、再び扉をボタンと音を立てて締めた。芽衣は溜息を吐き出して、タンスの別の戸棚を開く。そこには、まだ買ってきたままのパンツが一着あつた。以前、母が「安かつたの」といつて買ってきて、無理やり渡されたものだ。

白と水色の横シマの女性用下着。シマシマのパンツ……略して『縞パン』というやつだ。小さな白いリボンがワンポイントであしらってあって、それはそれで可愛いのだが、芽衣としては「ちよっと、子どもっぽい」という印象があつて、一度も穿くことなく、戸棚にしまっておいたのだ。

しかし、背に腹はかえられない。ぐずぐずしていたら学校に遅刻してしまうかもしれない。

仕方なく、芽衣は穿いていた薄いピンクのパンツを脱いで、白と水色の縞パンに穿き替えた。穿いてみると、大きさもぴったりで、意外と穿き心地は悪くないかもしれないと思う。

そして、縞パンを穿き終えて、諦めの付いたところで、芽衣は制

服を取り出し、すばやくそれを身にまとった。

芽衣の通う「私立五之神中学校^{いつのかみ}」の制服は、ブレザーだ。赤と黒のチェックスカートと、相性のいい紺色で、胸元には、校章のエンブレムが輝いており、女子はブルーのリボンか赤のネクタイを着用することを義務付けられている。芽衣はブルーのリボンを好んでいた。

「よし、準備万端！」

櫛でせっせと寝癖の付いた髪を解き、ようやく身支度を終えた彼女は、鞆を片手にダイニングへと走った。部屋の前で見張りをしていた母は、娘の朝食をテーブルに並べるために、いつの間にかダイニングいた。

テーブルに並べられた、こんがりトーストされた食パン、卵とレタスのサラダ、牛乳。おいしそうな匂いにつられそうになるが、ゆっくりしている暇はない。

芽衣は、その中から食パンだけを取ると、「ちゃんと、朝ごはんは食べていきなさい」という母の声をスルーして、食パンだけをくわえたまま、玄関口へ走った。そういえば、よく漫画とかであるシーンだよ、なんて思う時間的な余裕もなく、

「そんじゃ、いつてきまーす！」

と、ダイニングの母に向って、元気良く玄関の扉を開く。

芽衣の家は、マンションの十階にある。そのため、ひとたび玄関を開けば、目の前には、街を一望できる眺めが広がっている。芽衣は、うーんと背伸びをして、見晴らしのよい景色を眺めた。

春らしい透き通った青空には、雲が一つ二つ。心地よい朝の風も吹いている。「今日も快晴、きつといいことがあるかもしれない」と芽衣は、期待に胸を膨らませながら、学校へと向った。

その日、想像もしないようなことが起きるとも、知らずに……。

1. 「あと、五分だけ……」（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

2. 「しゃきつとせんか、バカものっ！」

片道十五分の通学路。芽衣はいつも、徒歩で登下校する。自転車の使用も認められているのだが、芽衣は自転車を持っていない。そもそも、乗れないのだ。あんな、不安定な乗り物よりも、いつそのこと空が飛べるようになったらいいのに、と芽衣は思う。

あたりは、静かな住宅街。ここを抜けて、おしゃれな商店街のある大通りを横断すれば、五之神中学校の学び舎が見えてくる。

私立中学らしい、洋風な建造物は、一見すると校舎に見えないが、校門には立派な立て札があり、校名が凛々しい字体で刻まれている。開校は明治時代。元は、近代淑女を養育するための女学校だったが、第二次世界大戦後、教育制度が変わってからは、男女共学の私立校となった。きつちりとした教育が受けられる割に、良心的な学費で、一般家庭に生まれた芽衣でも、通うことが出来る。ただし、学校生活の指導は、他校とは比べ物にならないくらい厳しい。

まずは、朝の挨拶。校門には毎日、日替わりで先生が立っていて、「おはようございます」を欠かしてはいけない。芽衣も、校門をくぐる前に、立ち止まり丁寧に挨拶をする。それから、広いグラウンドを歩き、昇降口へ。同級生や先輩たちにも、挨拶をする。

「おはようございます」

そして、いくら遅刻しそうでも、廊下は走ってはいけない。もちろん、遅刻するなどもつてのほかだ。細かいことではあるけれど、マナーやエチケットを守れない生徒には、学内の奉仕掃除などの罰が待っている。入学してひと月、今のところ芽衣はその憂き目に会っていないが、朝が弱いことは、大いなる不安でもあった。

ホームルーム開始三分前。どうやら、ギリギリセーフで、一年一組の教室にたどり着いた芽衣は、自分の机に着席して、ほっと溜息をついた。

「おっはよーっ！」

唐突な笑顔が、芽衣の目の前に現れる。ショートカットの良く似合う、芽衣のクラスメイトで、はじめての親友でもある、はやぶさかすみ 鮎房香澄だ。低血圧な芽衣と違い、朝からハイテンションに、元気を振りまいているようなその少女は、まだ心なしか眠そうな、芽衣の額に、勢い良くデコピン攻撃を与えた。

「あうっ……お、おはよう。かすみん」

「眼、覚めた？ ぼーっとしてたら、先生に叱られちゃうよ？ もしかして、芽衣ってば、夜更かしさん？」

「違うけど。かすみんは、朝から元気いっぱいだね。その元気、わたしにも分けてよ、かすみん」

「やだよ。あたしってバカだから、元気ぐらいしか取り得ないじゃん。元気まで分けたら、ホントに霞になっちゃうよ」かすみ

と、香澄は言うけれど、この学校の入試を突破したくらいだから、それなりに賢いと言うことだ。少なくとも、学力で言えば、芽衣と大して変わらないだろう。

「じゃあ、わたしが仙人になって、霞になったかすみんを食べてあげる」

「ちょー美味しいわよ、あ・た・し」

「わたしの大好きな、チョコケーキより？」

「うーん、それよりは、ちょっと不味いかもね」

二人は、そう言うてお互いに、噴出し笑い出した。くだらないことを言って笑い合えるあたり、芽衣も香澄も、由緒正しい私立中学校に通う生徒にしては、ごく普通の少女たちであると分かる。しかし、二人の笑い声も、朝の教室の騒々しさの一端でしかなかった。

その騒々しさを打ち破るかのように、教室のドアが大きな音を立てて、開け放たれる。

「静かにしなさい！ こら鮎房、さつさと席に着け！」

いちだ 革靴の踵を、こつこつと鳴らしながら、教壇へ向うのは担任の、市田先生だ。まだ、独身の三十二歳だが、パリッとしたシワのないスーツ、綺麗に整えられた髪はとても清潔で、スポーツマンも顔負

けの長身。ただ、ちよつと鋭い目つきが怖いような印象がある。

そんな眼に睨まれた香澄は「はあい」と間延びした返事を返して、芽衣のもとを離れ、自分の席に着いた。

「よし、ホームルームをはじめろぞ。委員長、出席を採れ」

先生の一声で、教室はしんと静かになる。一番前の席に座っていた、学級委員長の女の子が、すつと姿勢良く立ち上がり、出席番号順に出欠を取っていく。

と、その時だった。突然教室内に異変が起きた。何処からともなく鳴り響く電子音が、静かな教室いっぱいに鳴り響いたのだ。その音はけたたましく、消防車やパトカーのサイレンに近いような音だった。

そして音がなっている方向に、クラスメイトの視線が向く。

「わたし!？」

クラス中の視線を受けた芽衣は、びつくりして目を丸くする。しかし、芽衣の携帯電話は、こんなサイレンのような着信音じゃないし、そもそも、学校にいる間はきちんと電源を落としている。しかし、よくよく耳を済めると、サイレンの音は間違いなく、芽衣の回りから発せられていた。

更に異変は加速する。

『使用者の着用を確認。零式特殊兵装二十一型パ・縞風改、全機能の起動開始。現在の諸元入力』

サイレンの音に乗せて、何かのアナウンスのような声が聞こえてくる。しかも、それは芽衣の腰から下の辺り……つまり、スカートの中から聞こえてくるのだ。

芽衣は慌てて立ち上がり、「すみませんっ、席外します」とだけ言い残して、教室を飛び出した。その間もサイレンの音は鳴り止まない。

まさか、パンツが喋った? そんなことないよね。でもでも、わたしのパンツから音がしてる。どうしよう、このパンツ、変だ! 半分パニツクになりつつも、芽衣は走ってはいけない廊下を駆け

抜けて、手近な場所にある女子トイレの個室へと駆け込んだ。

『敵の襲来を感知。直ちに、戦闘態勢に移行。編風改起動！』

その声と同時に、サイレンが止まる。しかし、ほっとしたのもつかの間、

「ぬおっ！ 何事か、視界が暗転しているぞ！ こ、これは敵襲か！？ 何も見えんぞっ！！」

今度は慌てたような、男の人の声が、聞こえてきた。しかも、何故か以外にフィット感が良いと思っていたパンツが、やたらむずむずとしてくる。

「やあんっ！ 何コレっ！」

焦る芽衣を他所に、スカートの中からは騒々しく、

「人の声？ おのれ、敵の罠だな！？」「いや、これは機能が完全に起動していないだけか？」「そんなはずはない、ならば『玄武』で視界を切り開くまで！」

と、わけの分からないことをまくし立てる。

芽衣は、恐る恐る両手でそつとスカートをめくってみた。トイレの個室とは言え、はしたないと思われても、確かめずにはいられなかった。だけど、スカートの中、芽衣が穿いているのは、やはり普通の白と水色の横じまが入った女の子用のコットンショーツだ。

気のせい？

「ん！？ 何だ、何だ。突然視界が開けたぞ」

パンツが再び声をあげる。

「おや、貴様が小官の装着者か？ なるほど、視界を遮っていたのは、スカートであつたか。これは失念していた！ しかし、小官の装着者が貴様のような、少女とはそんな命令を受けていないぞっ」

ひとりでペラペラと喋るパンツ。その口調が妙に堅苦しいことや、「貴様」と乱暴に呼ばれることよりも、芽衣は自分が穿いているパンツが喋っている、という状況に驚愕した。別に、パンツに口がついているわけではないが、確かにパンツから声が聞こえるのだ。それも、男の人の声が。

芽衣は、悲鳴を上げること忘れ、まるで酸素不足の金魚のように、口をぱくぱくとさせる。

「どうした貴様。アホ面してるぞ！ 何をそんなに驚いているのだ！？」

「アホ面って何よ、驚くに決まってるでしょ、パンツが喋るなんて……。わたしまだ寝ぼけてるのかな。うん、そうだそうに決まってるよっ」

ぶんぶんと、頭を振ってみても、眼前に広がる光景が変わることはない。

「寝ぼけてる？ これは、夢でも何でもないぞ！ しゃきつとせんか、バカものっ！ 軍人たるもの、常に現実に目をむけよ！ 陸軍教練以前の問題！ 精神論で戦場を生き残れると思うなっ」

「戦場？ きょーれん？ わけのわからないこと言わないで。わたし、軍人じゃなくて学生なの。ただの中学生。……っていうか、わたし、パンツと喋ってる？ あうあう、頭がおかしくなっちゃったの？ お母さん、変なパンツ買ってこないでようっ」

「パンツ、パンツと失敬な娘だ！ 小官は、パンツではない！ ー見、女子用下着に見えるかもしれないが」

「一見もなにも、女の子用のパンツじゃん！」

「ええい、黙れ黙れ、小娘っ！！ 小官は、ただの下着ではない。

『零式特殊兵装二十一型パ・縞風改』。帝国陸軍第三技術研究室が開発した、軍事用下着だ！」

どーん、と宣言するように、縞パンが言う。どうだ、驚いたかとも言いたげだが、そんなことよりも「軍事用下着」という不可解な言葉に、芽衣は困惑した。

これって、兵隊さんが穿くパンツなのかな？ そんなものあるの？ っていうか、パンツが喋ってるし。いやいや、そもそも、男の人の声がするよ……。わたし、男の人を穿いてるの？

そう思うと、芽衣は急に、恥ずかしくなった。頭のとっぺんから火を噴き、耳の先端まで真っ赤になる。

「貴様、学徒と言ったな？　こんな、おぼこい小娘が小官を装着するのは、想定外だが、我が、高々度電探『青竜』が敵襲を感知した。直ちに脅威の排除のため、状況を開始するぞ」

だが、パンツの声は、芽衣の耳には届いていない。

こんな変なパンツ、脱ぎ捨ててしまおうか。でも、そしたら、今日一日パンツなしで過ごすことになる。それは、あまりにも無謀というか、無茶というか、プライドが許さない。

「ええい、貴様っ！！　聞いているのかっ！？」

「わひゃいっ！！」

「敵襲だと言っている。これを排除するのが、我が使命。同時に、小官の装着者でもある、貴様の使命だ。分かったなら、この建物の一番高いところに案内しろ。そこより、噴進器『朱雀』にて、戦場まで飛翔する」

「や、やだよ。何言ってるの、パンツっ」

「パンツではないっ！　堂々巡りの論議など、するつもりはないぞ。貴様には拒否権はない。もう一度、サイレンを鳴らしてやろうか？

今度は、大音量で。恥辱に合うのは貴様だぞ」

「わたし……パンツに脅迫されてるの？」

芽衣は抵抗する気力を失った。もう一度、サイレンを鳴らされて、学校中の人が集まってきたら、その方最悪だ。敵とか、朱雀とか、何を言ってるのか分からないけれど、それで、この喋るパンツを黙らせることが出来るなら、しばらくだけ付き合おう。後は早退でもして、この耐え難い恥しさと一緒に、このパンツをゴミ箱に棄ててしまおう。それでもって、お母さんを説教してやるんだ……。

2 . 「しゃきつとせんか、バカものっ!」(後書き)

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

3・「行くって、何処へ、何しに、どうやって!？」

女子トイレの個室を抜け出した芽衣は、誰にも見つからないように、そつと屋上へと走った。廊下を走って、一限目の授業をふけて……、もう懲罰は免れない。トイレ掃除か、それともグラウンドの雑草抜きか。いずれにしても、ここまで遅刻しそうになりながらも何とか穏便に過ごしてきた中学生活に、最初の汚点を残すことになるのは間違いなさそうだった。

しかし、その絶望的現実が迫っているおかげで、パンツが喋るという、あまりにも不可思議でありえない状況にも関わらず、なんとか芽衣の心の平静を保たせてくれていた。

屋上の扉は、普段から開放されている。危険防止用の高いフェンスに囲まれているので、休憩時間などは生徒たちの憩いの場になっているのだが、今は授業中、そこには誰の姿も見当たらず、春の風だけがさわやかに、芽衣のスカートをなびかせた。

「っ、着いたよ。学校で一番高いところ」

「ふむ。風速微風。風向良好。一気に上昇気流を掴めば……」

芽衣のスカートの中でパンツが一人ごちる。

「いろいろと、説明して欲しいんだけど。とりあえず、これからどうするの？ 早く授業に戻らなきゃ、向こう三ヶ月はトイレ掃除させられちゃうよ」

「便所掃除ぐらいどうした!! 常日ごろの鍛錬は、戦士にとって不可欠なことっ! そもそも、貴様が授業に戻るか否かは、この一戦にあるっ! 敵は待つてはくれないぞ!」

「さつきから、敵、敵って言うてるけど何なの? フンドシとか?」
「確かに、あのようなもの、パンツと一緒にされては敵わない……っ
ってパカもんっ!! 小官はパンツではないと言っているだろうがっ!」

「パンツがノリッッコミ……」

神さま、わたし何か悪いことでもしましたか？ 芽衣は両手を合わせて、青空に向って祈った。これが夢だというなら、早く覚めて欲しい。明日からは、ちゃんと早起きするし、大嫌いな人参だってちゃんと食べますから、と。

しかし、芽衣の祈りも空しく、

「貴様、本当に何も聞かされていないのか？ 小官が眠っている間に、小官の知らないことが起きた、とでも言うのか？ ええい、細かいことは、博士に聞けばいいことっ！ 今は、敵勢力の排除が優先事項だ！」

と、パンツは勝手に意気揚々とした声をあげる。

「行くぞっ！」

「行くつて、何処へ、何しに、どうやって！？」

慌てる芽衣を他所に、再びパンツがむずむずとする。くすぐったいような、そうじゃないような感覚。その瞬間、突然にお尻の当たる部分が、ガシャガシャと開閉し、円形グリのアフターバーナーがせり出してくる。ジェット飛行機などに見られる、噴射口に近い形状といったほうが分かりやすいか。

薄い生地のパンツの何処に、そんなものが格納されていたのかは分からないが、喋るパンツ並みに、それは芽衣に驚愕を与えた。

「きゃあっ！ 何コレ、いやっ！」

自分のお尻から、噴射口が現れたことに、うろたえる芽衣。

「二式噴進器、通称『朱雀』だ！ こいつで前線までひとつとびだ！ 口を閉じてろ、舌を噛むぞっ！」

「えっ！？」

ちよつと待つて、という暇もなかった。アフターバーナーはスカートを巻き上げ、火を噴いた。ごうっ、と獣のような唸り声が出たかと思うと、まるでロケットが飛翔するかのごとく、芽衣の体が飛んでいく。いや、飛ばされたというべきなのだろうか。

「きゃあああっ！ お尻から、わたしのお尻から火が出てるっ！ いやあああっ！」

「うるたえるな、小娘っ！」

「いやあんっ。わたし、わたしっ。もう、お嫁にいけないっ！」

芽衣は、悲鳴を上げながら、青空を飛んだ。空を飛んでみたいと願ったのは自分だが、まさかこんな最低の形で実現するとは思わなかった。そこに、うれしさなんて、ひとかけらもなかった。

「準備は完了したか!？」

頬に傷のある、大男が言う。鉛のように重苦しい声だ。彼の前には、十名ほどの男たちがいた。男たちは、配管が天井を這う狭苦しい通路で縦一列整列し、頬に傷のある男のほうを向くと、

「一班、準備完了!」

「二班、いつでもオツケーです!」

「三班も、いけますっ!」

と、次々と堅苦しい口調での報告を述べる。部下からの報告を聞いた頬に傷のある男は頷くと、くるりと踵きびすを返した。そちらも、人がすれ違うのがやっとと言う、狭苦しい廊下が続いている。壁に、大きくペンキで「BF1」と書かれていることからここが、何かの施設の地下通路であることが分かる。

その地下通路に居並ぶ男たちは、みな一様に同じ格好をしていた。黒いアーミースーツに身を包み、腰のためにはピストル、肩からはマシンガン、編み上げブーツにはナイフ・ホルダー、そして胸にはパイナップルのような形をした手榴弾を提げている。

ただならぬ出で立ちの彼らは、映画の出演者などではなく、そして、ここは撮影現場などでもない。西東京水道局管理のダム施設。去年稼動したばかりの、最新水力発電施設だ。その発電量は東京都全域及び、関東西側の大部分をカバーする。そんなダムは、武装した男たちが忍び込んでいることなど、全く知らないかのように、静かだった。

「火浦隊長。ひつぽう我ら同志に、何かお言葉を」

整列する部下の一人が言う。すると、火浦と呼ばれた、頬に傷の

ある男は、十名ばかりの部下たちに背を向けたまま、口を開いた。
「貴様たちに望むものは唯一つ。勝利だ。この国は、平和という温室に慣れすぎた。外敵への危機感の薄れ、政府も国民も、いまや大國の骨抜き状態。そんな者たちの目を覚まさせるため、国家を救うために、我らは立ち上がるのだ。今宵、戦争を始める！」

火浦が、筋肉質でゴツゴツとした腕を天井目掛けて突き上げる。
すると、背後に並ぶ兵隊たちも揃って「おうっ！」と唸る。

「これより、速やかに中央棟の第一タービン室を制圧。人的損害は最小限にとどめる。制圧後、時限爆弾を設置。タイマーをセット。タイマーが切れ、ダムが決壊する前に撤収する。これは、電撃作戦だ。一分一秒を無駄にするな」

「了解しました！」

「よし、では時計あわせ。三、二、一……今！　よし作戦開始だ！　！」

その合図を待っていたかのように、男たちは足音を殺しながらも、すばやく移動を開始した。発電所の地下通路は、とても複雑に入り組んだ迷路のような構造だが、リーダーである火浦をはじめとして、彼ら全員は、このダムの構造図を頭の中に叩き込んでいる。

彼らは、音もなく通路を駆け抜け、上へと上がる階段を駆け上った。その先は再び、迷路のような通路が続く。フルオートメーション化された施設は、最低限の職員しか居らず、火浦たちの侵攻には誰一人として気付かなかった。

そして、五分とかならないうちに、火浦たちは、一枚の大きな鉄の扉にたどり着く。そこには、「関係者以外立ち入り禁止」「第一タービン室」と書かれていた。火浦たちは、すばやく扉に張り付くと、扉に耳をつけて、向こうを確かめる。タービンの駆動する音以外には、いくつかの足音と話し声が聞こえる。数は多くない。

火浦は、ゼスチャーで「突撃！」の合図を送った。扉が、重苦しい音を立てて開く。体育館よりも広い室内には、巨大な円筒状のタービンが、いくつものパイプと接続されており、その麓では、ヘル

メットにブルーの作業着を着た作業員がいた。数にして、二十名強。
「全員おとなしくしろっ!!」

タービン室になだれ込んだ、火浦たちは、マシンガンの銃口をに向けて威嚇射撃した。バリバリという銃声だけで、室内は悲鳴に満たされる。

「一箇所に集まれ。抵抗する者は、直ちに射殺するっ!」

作業員たちはその指示に従って、すぐにタービンの前に集まった。銃口を向けられては、抵抗する者もないことを確かめた火浦は、腰ベルトに提げていた、束になった手錠を作業員たちに投げ渡した。
「その手錠で、隣のものとお手を繋げ。終わったら、ただちにこの場所を去れ。命が惜しいならな!」

すると、手錠を受け取った、作業員がきつく火浦を睨みつける。彼の行儀の胸には、「班長」と書かれたネームがつけられていた。

「お前たち、何者だ? 何の目的があつてこんなことを?」

声が踊っている。そう気付いた火浦は、班長に近寄り、マシンガンの銃口を班長の喉下に突きつけた。

「直に分かるさ。黙って、さっさと手錠をかけろ」

まるで血に飢えた狼のような、鋭い眼光に射すくめられた班長は、それ以上何も言い返せなかった。作業員たちは、それぞれ手錠で繋がると、そのまま慌てふためきながらタービン室を出て行く。

仕掛けは上々……と、あっという間にタービン室から、走り去って行く作業員の背中を見送りながら、火浦は思った。

「よし、爆弾の設置にかかれっ」

火浦の指示を受けた部下たちは、すばやく散らばる。あるものは壁際の計器の元へ。またあるものは、タービンの裏側へ。そして、各々、背負ってきたバックパックからそれを取り出した。

ちょうどお菓子の箱を三つつなげたような形をしていて、小さく「TNT」と書かれている。その上部には、デジタルタイマーが設置されており、表示は「15:00」でストップしていた。即ち、スイッチを入れれば、タイマーが作動し、時が来れば「TNT爆弾」

が爆発するという、時限装置だ。

「設置完了し次第、我らも撤収する」

と、火浦が言ったその時だった。どんっ、とお腹に響くような振動が響き渡る。一瞬、地震でも起きたのか、と思ったが、振動は立て続けに、二回、三回と続く。これは、ただごとではないと感じたのは、火浦だけではなかった。

部下の一人が、火浦の下に駆け寄ってくる。

「何事でしょう？ まさか、彼らがミスを？」

「それはないだろう。彼らも爆弾のプロ。誤動作するようなことはない。しかも、この振動は西棟からでも東棟からでもない。むしろ外部から……まさかつ」

そこまで言って、火浦の脳裏に、いやな予感が走った。

「爆弾設置作業、中断！ 全員警戒態勢をとれっ！」

震源と思われる方角を睨みつけた火浦は、マシンガン片手に、部下たちに命じた。

3 . 「行くって、何処へ、何しに、どうやって!?!」 (後書き)

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

4. 「だ、誰が変態かつ!？」

ダムへと続く、林道を五台の黒いバンが走っていく。側面には白い文字で「内閣府」と書かれており、もしも、路行く人がいたならば、何事かと振り向いただろう。しかし、ここは東京の山奥。人影は見当たらない。

そのバン隊のリーダーでもある、土門どもんえりな絵里南は先頭のバンの助手席で、少しばかりいらだっていた。絵里南は、二十歳にして、博士号を持つ才女である。ふだんは、とても冷静沈着で、所作言動の端々に知性を感じさせる。更に、男なら誰もが、一度は振り返ってうつとりしてしまうほどの美人。才色兼備とは、まさに絵里南のためにある言葉だろう。

しかし、今日の絵里南は、朝から落ち着きがなかった。言葉つきも多少乱暴になり、つねに眉間にしわを寄せていては、せつかくの美しい顔が台無しだとチームメンバーたちは思う。

「もっと、飛ばせないの? 縞風改の起動信号を確認してから、もう二時間近く経っているのよっ」

「無理言わないでくださいよ、土門室長。公用車が時速オーバーして、警察に捕まった、なんてことになったら、それこそ洒落になりませんよ!」

運転席でハンドルを握る若者が、困ったような顔をする。すると、絵里南はギロリと運転手をにらみつけた。こうなると、何故か年上のはずの運転手が、幼い少年のように見えてしまう。

「間違いなく、縞風改は敵襲の信号をキャッチして、この方角に向っている。この先にあるのは、西東京水道局のダム。そこにヤツらがいるのは間違いない」

絵里南は膝の上に広げたノートパソコンのディスプレイをにらみつけた。いくつかの数字と、地図画像。その上を進む青い矢印はバン隊を表しており、赤いマーカーの下には、アルファベットで「T

「0-21SC」即ち、縞風改のことを表している。その二つの矢印が交差する先には、巨大なダムがあった。

「まさか、やつらそこでテロをするつもりなんですか？」

「だから、急げって言ってるの！ だいたい、何の手違いをすれば、縞風改がランジェリーショップの店頭なんかに並ぶのよっ！」

きーっと、苛立ちを表すかのように、絵里南が頭を振る。

「落ち着け、室長」

と、後部座席から顔を出したのは、髭面のいかにも年かきな男だ。年齢に合った落ち着きがあるが、その視線は多少、絵里南への呆れが見て取れる。

「担当官はすでに左遷しただろう？ それに、本件に関しては、防衛省がおおっぴらに出動できない以上、俺たちの双肩に掛かっている。初仕事で焦っているのは分かるが、俺たちの任務は、ヤツらの排除と、縞風改の装着者を保護することだ」

「分かってるます。錦隊長^{にしき}。すべては、お祖父ちゃんの頼みですから、わたしもミスしたくないんです」

「だったら、俺たち実動隊のことを、もう少し信用してくれ」

錦の言葉に、絵里南は頷き、小さく溜息をついた。窓の外を流れる景色は、とても長閑だ。林の隙間からは、ダムの湖畔が見え隠れする。これがハイキングか何かなら、楽しいのだろうけれど、今は一刻を争う事態だ。しかも、自分は、このバン隊を率いる「室長」だ。

「やっと、ロストした縞風改を見つけたと思ったら、モグラたちが地下から出てくると重なるなんて、ツイてない」

「そりゃ、室長は女ですからね。アレついてないですもんね」

リーダーの緊張をほぐそうと思ったのだろう、運転手はニヤニヤしながら軽口を叩いた。再び、絵里南の刺々しい視線が、運転手を突き刺す。

「セクハラ裁判で訴えられるのがいい？ それとも、あなたに縞パン穿かせてあげましょうか？」

「うつつ、ど、どちらも遠慮します」

しゅんとなった、運転手はなおも縮こまる。その姿を見た錦は、ガハハと大口を開けて笑った。

やがて、バン隊は林道を抜ける。彼らの目の前に、ダム施設が見えてくる。発電とダム管理をフルオートメーションでまかなう、最新鋭技術の投入された未来的な建造物だ。着工から二十年、稼働し始めたのは去年のこと。

だが、彼らの目の前に現れたダム施設からは、もうもうと煙が舞い上がっているではないか。車内が一気に騒然となった。絵里南は、グローブボックスに取り付けられた無線機を取ると、「緊急事態！このまま、施設内に突入するわよ」と各車両に指示を通達する。「遅かったのね。『アカツキ』の連中は、すでに行動を起こしたってこと？」

「いや、違う。あれを見ろっ！」

後部座席から身を乗り出すように腕を伸ばした錦の指先。そこには、中学生くらいの幼い少女の姿が、小さく見える。絵里南は慌てて、双眼鏡を手にとった。爆発は、どうやら施設の内部から起きているのではない。そして、そのた立ち上る煙の向こう側に、少女はいた。

「あの子……。縞パン穿いてるっ！間違いない、あの子が縞風改の装着者よ！」

何が起こったのかを説明するため、時間を少しだけ巻き戻そう。

喋るパンツに出会い、パンツに命じられるまま、学校の屋上から飛翔した芽衣は、そのまま、街の空を飛んで行った。お尻から現れたジェット噴射は、芽衣にこの上ない恥ずかしさを与えた代わりに、飛行機並みの速度で、あっという間にその場所にたどり着いた。

「もう、お嫁にいけない」

と両手で顔を覆い隠しながら、半泣き状態の芽衣を他所に、パンツ……もとい縞風改はいたって冷静だった。施設全体を俯瞰できる

空中にホバリングをかけて、高高度電探『青竜』を駆使し、前方に見える施設内部を調べる。レーダーに反応があったのは、熱源反応と、生体反応。熱源は主にタービンのもの。そして、そこに集まる生体反応は、敵のもの。

「敵発見。ダム中央施設内部に、五名！ 零式特殊兵装二十一型パ
ー編風改、敵を駆逐するっ！」

「えっ、駆逐？ わっ、ちょっと、いやっ、きゃああっ！」

再び、芽衣のお尻の噴射口が火を吹くと、ダムの湖面をスレスレに飛翔し、芽衣の悲鳴と水煙を巻き上げた。そして、施設の手前まで接近し、一気に急上昇。芽衣は頭の中がシェイクされるような感覚に襲われて、クラクラしてくる。

「もー、いやあ。誰か助けて」

「泣き言を言うな、小娘っ！！ そんなことよりも、さっさと、スカートを捲り上げろっ！」

「はあっ！？ エッチなことじゃないでようっ、この変態っ」

「だ、誰が変態かつ！？ 貴様、小官を何だと思っているっ。これより、多目的雷撃管『白虎』にて、この施設に風穴を開ける。スカートを燃やされなくなったら、スカートを捲くれと、言ったんだっ！」

「えっ？」

戸惑っている暇はなかった。すぐにスカートの中が、またしてもむずむずしてくる。慌てて芽衣は制服スカートをたくし上げた。白と水色のシマシマのパンツが露になる。と、その拍子に、パンツのちようど腰の辺りの布地が開閉して、なにやら箱状のものが両腰に現れる。箱には、前方に向けて三つの穴が開いていた。

それが一体何なのか訊く前に、パンツの「一番、発射！」の声とともに、箱の穴から白煙が立ち上る。発射されたのは、小型のミサイルだった。ちようど、大きさとしては、ボールペンほどだろうか。真っ直ぐ煙の航跡を描きながら、ミサイルは、施設の壁に着弾した。激しい振動と、爆発音。小さなミサイルにそれほどの威力があっ

たとは、信じられないほどだ。更に、パンツは立て続けに、「二番、三番、四番、五番、六番、発射！」と叫ぶ。すると、一つずつ、すべての穴から、ミサイルが放出される。

五度の爆発は、ダム周辺の木々を揺らし、ダムの水面に巨大な波紋を広げた。そして、施設からたちのぼる煙が風にさらわれていくと、そこには、ぽっかりと大きな穴があいていた。

「ひゃあっ！ 建物に穴開けてもいいの？ っていうか、ば、爆弾だよ、今のっ！」

スカートを下ろすのも忘れて、眼前の光景に目を丸くする芽衣。

「うむ。九十九式貫通弾。鉄筋コンクリートの建物に、突入口を開くための、自動噴進砲弾だ」

「突入口？」

「敵は中にいる。即ち、国家反逆者どもだ。彼らは、武力を持つて平和なこの国を転覆させようとしている。現代風の言葉で言えば『テロリスト』だ。それを排除するのが、小官と小官の装着者に与えられた使命だ！」

パンツの高らかな声に、芽衣は呆然とするほかなかった。テロリストなどという言葉、普通の中学生は耳にする機会さえほとんどない。ただの大仰な言葉にしか思えなかったのは、無理もない。

「冗談？」

「本気だ。行くぞ、敵陣へ一気に切り込むっ！」

芽衣に事態を解釈する暇も与えないかのようにパンツはそう言うと、お尻のジェットを吹かせて、ダム施設の壁にミサイルで開けた穴に飛び込んだ。

「もう、いやああああ！」

芽衣の叫びは空しく霧散していく。

4 . 「だ、誰が変態かつ!？」 (後書き)

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

5・「しかも、こんな『茶番劇』に……」

ジェット噴射をこまめに切り替えながら、芽衣とパンツは、ダム施設の狭い通路を滑走した。芽衣には、何処へ行けばいいのか分からなかったが、パンツには電探^{レーダー}を通して行き先が見えているようで、一度も迷うことなく、その扉の前にたどり着いた。

「第一タービン室」

と書かれた大きな扉がぐんぐん迫ってくる。扉はぴたりと閉められており、このままでは硬い鉄の扉に激突してしまうというのに、パンツは減速しようとしなない。

「きゃああっ！　ぶつかっちゃうつ、ストップ、ストップーっ！！」
「臆するなっ！『白虎』で扉ごと打ち破るっ！！」

とパンツが言うと、再び腰の辺りに、ミサイル発射管の小箱が現れる。ジェット噴射口の『朱雀』もそうだがパンツの布地の何処にそんなものが格納されているのか、あまりにも不思議だが、もはやそんなことはどうでもいい。芽衣ははやく、夢から覚めて欲しいと祈った。

「一式翼付撤甲噴進砲弾、発射！！」

の合図に合わせて、小箱から二発のミサイルが射出される。先ほどの「九十九式自動噴進砲弾」よりは、幾分か大きく、先端が尖ったそれは、よりミサイルに近い形状をしていた。

どんつと衝撃が走り、芽衣の目の前が真っ白な煙に覆われる。ミサイルが激しく爆風を撒き散らし、鉄の扉を破壊し、芽衣が通れるほどの穴を開ける。ずいぶんと乱暴だが、それは、中にいるテロリストたちにも衝撃を与えていた。

「うろたえるなっ！！」

テロリストのリーダーでもある火浦は、慌てふためく部下たちを一括すると、扉を取り巻く白煙に向けて、マシンガンの銃口を構え、スイッチを「バースト・モード」に切り替える。敵の姿が見え次第、

一斉射を行うつもりだった。先手必勝というヤツだ。

しかし、煙の中から現れたのは、白と水色のシマパン……を穿いた少女だった。これには、逆に火浦たちが、先手必勝を食らったも同じだった。

「ガキがどうしてここに!？」

口走ったのは、火浦の部下の一人。中学校の制服を着た、どう見てもごく普通の少女に、マシンガンをぶっ放す勇氣は、その場にいたテロリストの誰にもなかった。

「くっ、『あのお方』の予見した通りになったか……」

ぼそり。火浦がひとりごちる。

「きやあつ! あ、あの、わた、わたしっ。……ひゃっ、それ、本物の鉄砲ですか？」

火浦たちの前にふわりと着地した芽衣は、爆風でめくれあがったスカートを押さえながら着地すると、男たちに、所謂パンチラを目撃されてしまったことよりも、目の前にいるただならぬ格好の男たちと、彼らが構えるマシンガンに怯えた。

「これか? 本物だ。実演して見せてやりたいが、あいにく我らは少女を撃ち殺す趣味は持ち合わせていない。それよりも、コレはどういうことか、説明願えるかな、お嬢さん？」

そついいながらも、火浦たちは銃口を芽衣に向けたままだ。警戒の眼差しは、芽衣を更に怯えさせる。しかし、説明しろと言われても、「喋る変なパンツに、無理やり連れてこられた」と言ったところで、信用してもらえそうにもない。というか、そんな話を信じてもらえるわけがないと、芽衣は思う。

「あの、わたしっ、その……」

上手い言い訳が見つからない芽衣がしどろもどろするのを眺めつつ、火浦はそつと部下の一人に目配せをした。

「予定外の事態です。どうします、隊長？」

火浦の背後で、部下の一人が近づいてきて小声で囁く。

「時間がない。あの少女ごところを撤収する他ないだろう。おそら

く先ほどの爆発は、この少女が起こしたものに違いない」

「は？ あの女の子がですか？」

「零式特殊兵装ならば、あり得ん話でもないだろう？ 少女がここに飛び込んできたとき、ちらりとあの娘の下着が見えた。あれは間違いない、縞風だ。ヤツら、すでに完成させていたと言うことだ」

「あのお方の、予見したとおり、と言うことですか。……それにしても、あの子のパンツ見たんですか？ 眼福でしたね」

「バカを言っな。みたところ、十二、三の子どもじゃないか。ガキの下着を見たくらいで喜ぶわけないだろう」

ニヤニヤとする部下を一喝した火浦は、ちらりと設置途中の「TNT爆弾」の箱を見遣る。これは、絶好のチャンスだと、火浦はほくそえんだ。

「零式の装着者が、あんな小娘なら与しやすい。作戦のついでに零式を持って帰れば、最高の手土産になるだろう……。作戦はこのまま続行。直ちに娘を捕縛、タイマー時間を調整して、爆弾をセット後、娘を抱えて撤収だ」

「しかし、零式のオマケの娘はどうするんですか？ まさか、殺すわけにはいかないでしょう？」

「零式を脱がせて、後は熨斗のしをつけて家へ帰せばいい。口封じの方法なら、何も殺すことはない。金でも握らせるか、軽い脅しでもかければ済むことだ。そのあたり本部も無駄な犠牲を払うつもりはないだろう。そういうことは、俺たち兵隊の考えることじゃない」

「ごもつとも。ならば、二人で娘を押さえます。隊長はほかのものと、TNTの設置お願いします」

「分かった」

火浦とその部下は頷き合わせ、フォーメーションを展開しようとする。と、突然、乱暴な声がタービン室に反響する。

「ええい、小娘っ！ スカートが邪魔だっ！ スカートをまくつていろうと言っただろうがっ！！」

声は、芽衣のスカートの中からだ。

「で、でで、できるわけないでしょっ！　だって男の人がいっぱいいるんだよっ！」

「ふざけるなっ！　目の前にいるのは敵だっ！　恥ずかしがっている場合ではないぞ。さっさとスカートをまくれっ！　さもなくば、このまま『白虎』をぶっ放すっ！」

「それはダメっ」

慌てて、芽衣はスカートをたくしあげた。迫り来る兵隊の眼前に、縞パンがあらわになる。次の瞬間、多目的雷撃発射管「白虎」からミサイルではなく、ビー玉大の砲弾が発射された。兵隊たちは、危険を察知したのか、急ブレーキをかける。しかし、ビー玉大の砲弾は、芽衣のほんの数メートル先に落ちると、コロコロところがって止まる。

不発？　誰もがそう思った拍子に、パカッと砲弾が割れて、中からもうもうと白煙が立ち上った。

「煙幕だっ！　しかも催涙ガス入りかよっ！」

兵隊の一人が叫ぶ。あっという間に、火浦を含む兵隊たちは、煙の中に包まれてしまった。聞こえてくるのは咳と嗚咽だけ。

「小娘っ！　今のうちに、敵が仕掛けたTNTの信管を破壊しろ」
好機とばかりに、パンツが芽衣に指示を与えた。しかし、TNTだの信管だのいわれたところで、ごく普通の女子中学生である芽衣には、何のことだか分からない。思わずきょとんとする芽衣に、パンツは苛立ちを募らせた。

「くっ！　本当にどうなっているんだっ！？　小官の装備者が、爆弾解体の知識さえも持ち合わせていないとは、聞いてないぞっ！」

「わたしだって、爆弾とか、聞いてないよっ」

「貴様、本当に小官の装備者選ばれた、軍人かっ！？」

「だーかーらーっ！　違うって言うてるでしょ？　わたしは、ただの中学生だよっ。もう、やだっ。何なの、このパンツ。喋ったり、ミサイルが飛び出たりっ」

「パンツではなーいっ！！　零式特殊兵そ……」

ガチャリ。撃鉄の音とともに、芽衣の額に「九ミリ拳銃」の銃口が突きつけられ、パンツは閉口する。静けさとともに、白煙が薄くなっ
ていき、芽衣は背筋にぞくりと悪寒を感じた。

「やってくれるな、お嬢さん。いや、零式……」

火浦の鋭い眼光がゴーグルから覗く。煙幕弾が煙を吹く瞬間、それがただのガスでないことを察知した火浦は、すかさず隠し持っていたガスマスクを着用したのだ。ほかの者たちは、出遅れたらしく顔を抑えて唸っている。

「やるな、こやつ」

パンツが低い声で言った。しかし、その視界はスカートによって遮られてしまう。拳銃を突きつけられた芽衣が捲り上げていたスカートから手を離れたのだ。

「零式よ、ここへ来るまで、どのくらいのエネルギーを費やした？ダム施設に突入口を開くため、どれだけの火力を消費した？そろそろお眠の時間だろう？」

火浦は余裕のある口調で、芽衣ではなく、芽衣の穿いている縞パンに語りかけた。

「なにをつ。まだ、戦える。小娘、スカートが邪まだ……くつ、ういじんではりきりすぎたか、むねん……」

突然、パンツが静かになる。あのむずむずした感覚も起きない。それは、火浦の言ったとおり、パンツの燃料切れを示していた。万事休すとはこのことだ。喋るパンツが、一瞬にして、ただの女性用下着になってしまったのだ。

「こんなところに来たことを後悔するんだな、お嬢さん。いや、そのパンツを穿いてしまったことを後悔した方がいいのか？」

冷たい銃口がこつりと、芽衣の額に当たる。芽衣は、怯えた瞳で小さく振るえながら、その場にぺたりと座り込んでしまった。

「わたしっ。そのっ、何にも知らなくて……、ふあっ」

今にも泣き出しそうな芽衣。だが、火浦の目つきは、少女の涙にも動じる様子ではなかった。鈍色にひいろの銃口は、おもちゃには見えない。

おそらく、火浦が言ったとおり、本物の銃だろう。

とんでもないことに巻き込まれてしまった。ちゃんと早起きすればよかった。自分でパンツを洗濯しておけば、お母さんが買ってきたこんな喋るパンツを穿かなくて済んだのに。そうしたら、ちゃんと授業に出て、休憩時間には、かすみんと下らない話をして笑ってたのに。そしたら、こんなところで死ななくて済んだのに。

芽衣の恐怖と悲しみがグルグルとめぐり、それが涙に変わって、瞳から零れ落ちる。最悪だ、最低だと、心の中で叫んでみても、目の前の怖いおじさんは、許してくれないだろう。なぜなら、相手はテロリスト。映画などに登場するテロリストは皆、容赦なく人を殺していく。目的のためには、老人も、女も、子どもでさえ関係ない。きつと、自分も同じ目に合わされるんだ。鉄砲で撃たれてしんじやうんだ。でも、まだ死にたくないよう。もう少しくらい、生きていたいよう。

神さま、助けてっ！！

遠くなる意識の中で、芽衣は力いっぱい叫んだ。困ったときの神頼み！

「女の子を泣かせるのが趣味だとは思わなかったわ。広域テロリスト指名手配犯、『アカツキ』構成員、火浦誠っ！！」

タイミングよく、芽衣の背後、即ちタービン室へ通じる通路の方から声と足音が聞こえた。良く通ったその声は、女の人のものだった。その声に反応して、より険しい顔つきになった火浦は、「誰だ！？」と拳銃の銃口を扉の方に向ける。

「女神さま……？」

芽衣は、涙でぐずぐずになった顔で振り向いた。

「可愛い顔が台無しよ、お嬢ちゃん」

通路の影から姿を現したのは、ブルーグレーのスーツ姿に防弾チョッキを着込んだ、二十歳くらいの女性だった。彼女は、拳銃を両手で構えながら、ニッコリと、芽衣に微笑んだ。悠然とタービン室に入ってくる姿は、まさに女神のように、芽衣の瞳には映った。

「お前は……土門絵里南博士！」

それまで冷静だった火浦の顔に、若干のうろたえが生じる。

「あら、レディに対してお前って言うのは失礼よ。まあ、無骨なテロリストに、紳士の心得を説くのは、釈迦に説法よね」

火浦の表情に比べて、絵里南は余裕の口ぶりだった。それもそのはず、いくつもの足音が、絵里南の背後から聞こえたかと思うと、フリッツヘルメットをかぶった、武装集団がタービン室へとなだれ込んできた。

「全員、武器を捨てて大人しくしろっ！ 両手を高く、その場に膝まづけっ！」

武装集団のリーダーと思しき髭面の男が声を張り上げると、芽衣のパンツが放った煙幕弾にもがいていたテロリストの兵隊たちが、次々とマシンガンを投げ捨て、ホルドアップのポーズをとった。

「お役所にしては、お早い対応で……。しかも、こんな『茶番劇』に武装部隊が総員出動とは、豪勢なもんだ。税金の無駄遣いってやつじゃないか？」

拳銃を捨てて、膝まづいた火浦は精一杯の皮肉を口にしたが、絵里南はそれをスルリとかわして、腰を抜かしたままの芽衣の方に歩み寄った。

「大丈夫？ ごめんないね、わたしたちの所為でこんな目に合わせちゃって。わたしは、『内閣府特別危機管理対策室』の室長、土門絵里南。あなたのお名前は？」

「わ、わたし、木本芽衣です」

予想以上に声の上擦っついて、芽衣はすこし恥ずかしくなった。だが、絵里南は失笑することなく、女神さまのような微笑を浮かべ、芽衣に手を差し伸べた。少しだけ、いい匂いがふわりと、芽衣の鼻をくすぐる。

「そう、芽衣ちゃん。あなたに良く似合った可愛い名前ね」

「あ、あの、あのっ。これって、一体なんなんですか？ 映画の撮影ですか？」

「違うわ、残念だけど。事情は後で説明するから、とりあえずここを出ましよう。コーヒーの一杯くらいご馳走させて」

芽衣は、絵里南の言葉にこくりと頷き、そっと周囲を見回して、連行されていく火浦たちの姿に、これは夢でも、映画の撮影でもないことを確認すると、差し伸べられた絵里南の手をとった。

5 . 「しかも、こんな『茶番劇』に……」 (後書き)

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

6. 「遠慮は美德じゃないわ」

最近のオフィスに良く見られる、防音ガラスに囲まれた、応接室。応接室の向こうでは、並べられたデスクに向って、たくさんのスーツ姿の人たちが、仕事に励んでいた。今、応接室にいるのは、芽衣一人だけ。芽衣は応接機の椅子に座って、縮こまっていた。緊張しているのだ。そんな芽衣の前には、香ばしい香りを立てるコーヒーと、小さなお皿に乗せられた大好物の、チョコケーキが置かれている。

「あら、遠慮しないで召し上がれ」

突然声がしたので、芽衣は驚いて顔を上げた。すると、ガラス扉を開けて、絵里南が応接室へと入ってくる。彼女の手には、茶色の封筒が握られていた。

「この場合、遠慮は美德じゃないわ。お腹、すいてるんでしょ？」

「そ、それじゃ、お言葉に甘えて……」

どうやら、お腹がすいている芽衣は、ちょっと照れながらも、チョコケーキにフォークを刺した。口の中に広がる、ほろ苦さと甘さに、たった数時間前、死にそうな目にあったことも忘れて、芽衣は舌鼓を打った。

絵里南はそんな少女の姿に目を細めつつ、向かいの座席に腰を下ろす。

「ケーキを食べながらでいいから、わたしの話を聞いてもらえるかしら？」

と、優しくそんな穏やかな口調で絵里南が言うと、芽衣はこくりと頷く。その少女らしい仕草を確かめた、絵里南は、封筒から応接機の上に、三枚の写真を取り出した。一つは、あのテロリストの男の顔写真。別の一つは、顔じゅうシワだらけなのに瞳はキラキラとしている老人の写真。そして、最後の一枚は、何故かモノクロで、そこに映し出された男は、詰襟の服を着込んでいた。

芽衣が絵里南によって救われ、タービン室から屋外に出ると、ダム施設の周りには、いつの間にか、警察の車や消防車が右往左往していた。そんな中、絵里南に手を引かれた芽衣は、黒いバンに乗せられた。バンの側面には白い文字で「内閣府」と書いてある。

「錦隊長たちは、おっつけ帰投することになってるから、わたしたちは先に本部へ帰ります。マスコミの目に止まる前に、車、出して」と、後部座席に芽衣とともに乗り込んだ絵里南が、運転手の男に命じる。どう見ても、運転手の男のほうが、絵里南よりも年上に見えるのだが、運転手の男は「了解しました」と丁寧な言葉で返して、バンを発進させた。どうやら、バンの後部窓ガラスはマジックミラーになっているようで、外からは、芽衣の姿は見えない。仕事に追われる警察官たちの誰も、バンに乗り込んだ少女のことを気付いてはいなかった。

バンは林道を下っていく。絵里南は、ずっと芽衣の手を握っていてくれたが、終始無言だった。時々、運転手の男が、ちらちらとこちらを見る。そのたび、バックミラー越しに視線が合って、芽衣がぺこりと頭を下げると、運転手はニッコリと微笑んでくれた。

鉄砲を持っていたり、防弾チョッキを着ていたり、テロリストの男と知り合いのようだが、どうやらこの人たちは、怖い人ではない、と芽衣は少しだけ安堵した。

やがて、バンは東京の田舎道を抜け、都会らしい景色の中を走る。ちょうど時刻はお昼ぐらいだろうか？　今頃、かすみんが心配しているかもしれない。もしかしたら、先生たちまで心配しているかもしれない。携帯電話もなにもかも、教室に置きっぱなしだ。そういえば今日の給食のメニューは、大好きなチョコケーキがデザートについていたはずだ、ということをお願い出した芽衣のお腹が、可愛らしく「くっ」と鳴る。

それを聞いた、絵里南と運転手がどつと噴出して、静かだった車内が賑やかに変わる。芽衣は頭に血が上るくらい恥ずかしくなった。

「本部に着いたら、コーヒーのついでに、何か食べ物もご馳走してあげるわ。たしかわたしの部屋の冷蔵庫に何かあったと思うから」と、絵里南が言う。すると、運転手の男がちらりと後部座席に目をやって、

「それ、賞味期限切れてないですよね？ 室長は、そういうの無頓着だから」

と、合いの手を入れる。すると、絵里南は、運転席のヘッドレスト越しに、グーの拳を叩き付けた。

「余計なことは言わなくていいの。ちゃんと前見て運転しなさい。道交法違反で警察に捕まりたくないって言ったのは、あなたでしょ？」

「はいはい、そうでした。まったくもう、室長は乱暴なんだから……」

語尾のあたりは、ごにごによとしていて、絵里南の耳には届かなかった。

すでに、車窓を流れる景色は、ついにビルの森へと変っていた。

バンは、斜め前方に特徴的な国会議事堂を見ながら、あるビルの地下駐車場へと入っていった。

そこそが、「内閣府特別危機管理対策室」の本部オフィスがあるビルだった。

「この男は、火浦誠。^{ひつらまこと}そして、この老人は水瀬隆信。^{みなせたかのぶ}そして、こっちの白黒写真が……土門一之介^{どもんいちのすけ}」

写真の男たちの名前を紹介されたところで、芽衣には良く分からず、口元にケーキの欠片をつけたまま、「はあ」と生返事とともにぼかんとする。絵里南はくすりと笑い、まず火浦の顔写真を指差した。

「火浦は、湾岸戦争以降、アフガニスタンなどの中東アジアで傭兵として、国連軍やアメリカ軍と戦ってきた男なの。公安当局も警視庁公安部もマークしてるテロリストよ」

「テロリストって、本当にいるんですね。わたし、映画の中の話だと思ってました」

「無理もないわ。平和に生きている日本人にとっては、無縁の存在だもの。そして……この人。水瀬は、元日本陸軍大佐で、戦後、衆議院議員を三期務めた人物。今年で、百歳になるご長寿ね」

「すごい、偉い人なんですね」

「そうね、たたの国会議員なら、偉い人よ。でも、この男はそんな尊敬を集めるような人物じゃないの。彼が百歳になっても、この写真のようにギラギラとした目つきで生きているのは、彼の野望がまだ燃え尽きていない証拠。……ところで、芽衣ちゃんは、今から六十五年前、日本がアメリカと戦争していたのはご存知かしら？」

突然そう振られた芽衣は、口の中でもぐもぐやっていたチヨコケーキを飲み下して、こくりと頷く。あまり詳しくはないけれど、学校の授業で習ったことがある。

六十五年前、日本はまだ、天皇を国家元首とする帝国主義、軍国国家の時代だった。日本が戦争を始めた理由はさまざまだが、アメリカを主とする欧米列強と利害を悉く違えたというのが、大きな理由の一つだろう。そうして始まった戦争を、太平洋戦争という。当初、戦争は日本軍は、破竹の勢いだったが、アメリカの物量を前に、徐々に形勢は逆転し、ついには四年に及ぶ戦争に、敗北という形で幕を降ろした。その戦争で、命を落とした人たちは、何十万人、いや、それ以上にものぼる。それだけ悲惨な戦争だったのだ。そのことを悔いた日本は、素直に戦争を過ちと認め、二度と戦争をしないと誓い、六十五年にも及ぶ平和を享受するに至った。

「日本は、戦争に負け、国民も国もみんなボロボロになったけど、その後の日本人たちの努力で立ち直った。だけど、それは仮初の平和だと、この水瀬は、国会審議の場で訴えた。日本を脅かす、夷敵の存在は今もつねに、日本の領土を脅かしている。それらに対抗するため、諸外国を圧倒する軍事力を有し、日本国があまねく世界の安定を司るべきだ。それが、神に選ばれた国、神州日本国のあるべ

き姿だと」

「それって、日本がたくさん爆弾とか持って、世界を支配するってことですか？」

「うん、理解が早くて助かるわ。もともと、水瀬は太平洋戦争の終結当時、陸軍内にあった、継戦派のグループに所属していたの。戦争が終わって、陸軍は解体されたけど、そのグループは消滅していなかった。危険思想の持ち主として、国会を追放された水瀬は、継戦派グループの首魁^{しゅがい}として、公安のマークから逃れるように、メンバーを引き連れて地下に姿を消した。それが、今から三十年以上前の話」

そう言って、絵里南はもう一度火浦の顔写真を指差した。

「それからしばらくして、水瀬は中東で傭兵として活躍していた火浦を呼び寄せ、テログループ『アカツキ』を結成した。彼らの目的は、テロによって現日本政府を倒し、新たな日本、つまり、彼らが理想とする、強大な軍事力を持った日本を作ること。そのためには、国民の犠牲も厭わない。そういう連中」

「ひどい……」

芽衣は、拳銃を突きつけられたときのことを思い出したのか、青ざめた顔をしてうつむいた。

「そう、ひどいことをするのがテロリスト。明日の一億の命の為に、今日の一人の命を奪う。それは、この世界において許される行為じゃない。だから、ここが作られたの。『アカツキ』の存在が知られてから、国家の安全を、防衛省に代わって、極秘裏に守るため、内閣府に新設された特別室。もう少し噛み砕いて言えば、水瀬の手からみんなを守るためのチームよ。そして、あなたが穿いてしまったその下着が、わたしたちの切り札」

「えっ？」

ことさらに驚いてみせる芽衣。ダム施設のタービン室で、燃料切れを起こしてすっかり大人しくなってしまった喋るパンツだが、芽衣はまだそれを穿いたままだった。

「そのパンツは、わたしのお祖父ちゃん、この白黒写真の土門一之介が、戦時中、陸軍の技術開発部で開発した秘密兵器なの。高高度レーダー、多目的ミサイル発射管、小型探照灯、多目的レーン砲、ジェット推進装置、を搭載した、学習型人工知能兵器。なんで、女子用下着型なのかは、この際聞かないで。それだけは、わたしにも良く分からないから」

「土門さんの、お祖父ちゃんは今どうされているんですか？」

「絵里南って呼んで、堅苦しいのは苦手だから。わたしのお祖父ちゃんは、十年前に天国に行ったわ。水瀬を止められなかったことを悔やみながら。そして、これが、お祖父ちゃんが今際の際に残してくれた、新兵器の設計図を写真に起こしたもののよ」

そう言って、絵里南は封筒から、黄ばんだ設計図の写真を取り出した。設計図の隅には、「縞風」と書かれており、事細かな説明文とともに、横じま模様のパンツが描かれていた。それこそが、六十五年前、絵里南の祖父が「帝国陸軍第三技術研究室」にこもって、開発した新兵器だった。

「だけど、設計図が出来上がったその日は、終戦の日だった。お祖父ちゃんはせめて自分の考えたものを見てもらおうと、当時上官だった、水瀬にこの設計図を見せた。それが、水瀬が継戦派グループに入るきっかけになったって、お祖父ちゃんは言っていたの。もっとも、当時の科学技術では、このパンツを完成させられなかったでしょうけど。でも、六十余年経って、現代科学をもってついに完成させることができた縞風は、『アカツキ』に対抗しうる、唯一の手段なの」

「あの、どうして……そんなすごいパンツが。このパンツ、お母さんが安売りで買ってきたって言うてました」

「それは、わたしたちのミス。開発製造の責任者が、何処をどう手違えたのか、一般の流通に流してしまったのよ。アカツキのスパイも疑ったけど、依然としてあなたの手に渡った理由は良く分からないの。ごめんなさいね」

絵里南が言うと、芽衣は食べかけのチョコケーキに突き刺していたフォークを置いて、少しだけ困ったような顔をする。

「あの、絵里南さん。パンツはちゃんと洗ってお返しします……」

「そうしてもらえると、ありがたいんだけど、そうも行かないの。そのパンツは、セキユリテイのために、一度穿いた人を、装着者として認識すると、ほかの人が使うことができない仕組みになっている」

「そんなっ」

「アカツキメンバーは火浦だけじゃないわ。火浦を逮捕しても、これから、彼らのテロルはもっと激しくなる。そのためには、縞風と、縞風の装着者であるあなたの協力が必要なの」

「ええっ！？ テロリストの人たちと、戦えって言უნですか？

そんなのっ、そんなの無理ですっ」

「無理を承知でお願いしてるの。『アカツキ』が本格的に動き出した今、新しい縞風を製造している余裕はない。今、あなたが穿いている、縞風しかないの」

絵里南の手がそつと、芽衣の手を包み込む。女神さまの瞳に懇願の色が見えた芽衣は、どうしていいのか分からなくなって、思わず目を逸らしてしまった。そんな芽衣の姿に、「そうよね」と呟いた絵里南は、長いまつげを伏せて、

「こんなことをお願いするなんて、ふざけてると思うわ。だから強制はしない。でも、この国に住んでいるみんなを守るのは、あなただけなの。水瀬は残り短い余命で、確実にこの国に住む人たちを危険にさらす。あなたの家族や友達も」

「だけど……」

「火浦が捕まったことで、やつらも一週間ほどは静かにしてるでしょう。だから、すぐに答えを出さなくてもいいわ。今日のところは、お家に帰って、ゆっくり休みなさい。そして答えが出たら、教えて」

絵里南はそう言うと、芽衣の手を離して立ち上がった。そして、芽衣に背中を向けると、部屋の隅の小さな台に取り付けてある内線

電話の受話器をとる。

「室長の土門だけど。至急、車両部に繋いで」

その口調は、芽衣に語りかけた優しい口調ではなく、内閣府特別危機管理対策室の室長としての威厳のある声だった。

「もしもし、車両部？ 護衛をつけて、木本芽衣さんをご自宅までお送りして、ご両親に事情を説明。それから、事後処理班を五之神中学校に派遣して」

絵里南はそれだけ伝えると、受話器を置いた。再び芽衣の方を振り返った絵里南の笑顔は、元通り優しいものだったが、芽衣は事の重大さに触れて、すっかり困り果て気落ちした様子で、俯いていた。

すっかり外は夕刻の日差し。全部が夢だったと思っていたけれど、コーヒートの苦さも、チョコケーキの美味しさも、それが夢でないことを、充分に知らしめていようだった。

6 . 「遠慮は美德じゃないわ」(後書き)

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

7. 「何か、悪いことしたの？ 不良デビュー？」

リビングで、芽衣の父親と母親は、娘とそっくりな困った顔をしている。両親の前には、スーツ姿の男が座り、事情を噛み砕いて説明しているところだった。突然娘を連れて現れた「内閣府」の使いだというこのスーツ姿の男に、慇懃^{いんきん}に名刺を渡された両親は、それだけでも驚いたのだが、その後続く話は、耳を疑いたくなるほどだった。

大人である二人にとって、「テロリスト」だの「秘密兵器」だのと映画の中の出来事のようにしか聞こえず、俄かには信じがたい。しかも、自分たちの愛娘は、その秘密兵器の装着者であり、日本の命運がその小さな肩に掛かっていると言われたところで、安易に「分かりました」とは答えられず、そのために二人とも困った顔をしているのだ。

そんな両親を、リビングの廊下からこっそり覗き込む、二つの視線があった。ひとつは、芽衣のもの。もう一つは、芽衣の妹、優衣^{ゆい}のものだった。

「お姉ちゃん、何やらかしたの？」

優衣が声を潜めて、芽衣に言う。

「何も……別に」

「ってことはないでしょ？ だって、あの小父さん、『ないかくふ』っていうお役所から来たって言うてたじゃん。フツー、そんなところの人が、サラリーマンのお家に来たりしないよ。しかも、お姉ちゃん、リムジンカーみたいなのに送ってきてもらってさ、お姉ちゃんのくせに」

優衣は小学生だ。しかし、小学生らしくない疑いと探りを入れるような視線に、姉である芽衣は思わずたじろいだ。芽衣と優衣の力関係は、圧倒的に妹の方が上で、芽衣は時々、じつは自分の方が妹ではないかと思うことがある。

「まあ、あたしは、お姉ちゃんが何したのか知らないけど、おかげで塾休めるから、ラッキーなんだけどね」

と、へらへらしつつ、優衣は再び、眉を垂らし「はあ」「そう言われましても」と生返事を繰り返す両親の顔を、遠目に見た。

「ねえ、お姉ちゃん。何か、悪いことしたの？ 不良デビュー？」

「そんなわけないでしょ。あんたみたいに、世渡り上手じゃないだけだよ」

「別に、あたしは世渡り上手じゃないよ。ただ、ちゃんと学校のテストでいい点とって、お父さんとお母さんの言うことを守ってるだけ。そうすれば、人生上手くいくだけだよ」

「そういうのを、世渡り上手っていうの。優衣ってば、そう言うところだけ、ずるがしこいんだから……」

いつもなら、このあたりから姉妹の口喧嘩が始まる。どちらかと言えば、芽衣が言いくるめられて終わるのだが、その日の芽衣は違った。力なく肩を落として踵を返すと、リビングに背中を向けて、自分の部屋へと向う。

「お姉ちゃん……。変なの」

と、優衣は小首をかしげながら、姉が自室へ姿を消したのを見届けると、再びリビングの扉の影から、こっそりと両親の顔を覗いた。スーツ姿の男の難しい話は、まだ続いているようだ。

絵里南は室長に与えられる個室のオフィスで、パソコンのディスプレイとにらめっこしていた。今日起きたテロ事件の報告書をまとめているのだ。室長という権限のある役職とは言え、仕事の大半は、事務処理のようなもので、そういう仕事こそ部下に任せられないから、厄介だ。

「ふうっ」

溜息をつきながらも、手は休めない。報告書をまとめながら、絵里南は頭の隅で、芽衣のことを考えていた。芽衣を送った後、前もって依頼していた芽衣の素性に関する調査書が、部下から上がって

きた。

ごく普通の十三歳の中学生の。父親は商社のサラリーマンで、母親は専業主婦。二つ年下の妹がいて、家族円満に暮らしている。戦争だとか、テロだとか、そういうものとは無縁の生活を送っている少女の元に、何の因果か、祖父の開発したパンツ型秘密兵器が紛れ込んでしまった。それは、きっと、彼女の平穏な生活を壊してしまうだろう。

それでも、防衛省や公安がおおっぱらにテロ対策すれば、国際情勢や政治において、日本に不利益が降りかかる恐れがあり、それは同時に水瀬の「アカツキ」に隙を与えてしまう。彼らは、最悪の有事にしか動けない存在なのだ。アカツキのテロを水際で防ぐ、そのために「特別危機管理対策室」は作られた。そして、最小規模でテロに対抗するには、あのパンツと、パンツの装着者が必要不可欠だ。本来なら、あのパンツを最初に装着するのは、開発者の孫娘であり、この特別室の責任者である、絵里南だった。それが、担当官のミスで、ごく普通の女の子の手に渡り、彼女の平和を乱そうとしているのだから、絵里南としては心苦しいものがある。

「それで、責任者なんて、言えないわよね」

ひとりごちた絵里南は、手元のカップを手取る。可愛らしいパング柄のマグカップだ。それを口につけて初めて、中が空であることに気がついた。絵里南は再び溜息をつく、席を立ち、おかわりのコーヒーを淹れるため、個室オフィスの扉を開けた。

特別危機管理対策室には、コーヒーマーカーが一つしかない。それは、一般職員たちが仕事する、メインオフィスの隅っこだ。個室が与えられている室長の絵里南にとっては、面倒この上ない。

個人用のコーヒーマーカーを買って部屋に置いておいた方がいいのかしら、などと思っていると、部屋を出た拍子に、突然何かに視界が遮られた。

「きゃっ！」

「わっ！ すみませんっ」

廊下を足早に通り過ぎようとしていた、グレーの作業着に工具箱を持った男にぶつかったのだ。そういえば、このビルのメンテナン
ス日だったことを、絵里南は思い出す。

「こちらこそごめんなさい。メンテナンス、終わったのかしら？」

「え、あ、はい。何処にも異常はありませんでした。後で、報告書
の方は、参事官さんの方にメールで送っておきますので」

メンテナンス会社の作業員の男は、にこやかにそう言う、絵里
南にぺこりと頭を下げて、エレベータールームの方へ歩いていく。
もう、かれこれ三十年選手のビルだから、あちこちにガタが来てい
る。仕方のないことだが、この超忙しい日にメンテナンスがバッテ
ィングするとは思ってもみなかった。

絵里南は、去り行く作業員を見送ると、三度溜息を漏らして、彼
とは反対に、メインオフィスに向って歩き出した。

メインオフィスでは、公務員の就業時間はすでに終わっているが、
特別室のメンバーたちはみな、並べられた机に座って、残業をして
いる。きっと誰もが、今日は家に帰れないことを覚悟していること
だろう。そんな風に職員の姿を見つめながら、絵里南は手近な職員
にマグカップを差し出した。

「新田^にくん、悪いけどコーヒー淹れてくれない？」

しかし、新田と呼ばれた若い職員は「いいですよ」と返事を返し
ながらも、パソコンのディスプレイから目をはなさなかった。気に
なった絵里南は、彼の背後に歩み寄ると、彼の見つめるパソコン画
像に目を投じた。

「何見てるの？」

「今日、火浦が襲った西東京ダムの、監視映像です。ちょうど、火
浦たちのいたタービン室の、監視カメラが捕らえていたものなん
ですが、少しだけ変だなんて思っ」

新田は、そういいながら、映像を巻き戻す。

「あのパンツの女の子が突入してくる数分前の映像です。火浦たち
が、タービン室に入ってきて、威嚇射撃。職員たちを一箇所に集め

て、手錠をさせて、タービン室から追い出します」

「ええ、それなら、わたしも知っているわ。何処が具体的に变なの？」

「色々ですよ。まず、この施設のセキュリティは、かなり万全です。センサーに引っかかる何かあれば、区画ごとにシャッターが降りて、犯人を閉じ込めます。ネズミ一匹だって逃がさない、という触れ込みですからね。でも、実際には、火浦たちによって、セキュリティが切られていた様子ありません。それに、警備員の姿が何処にも見当たらないんです。次に……、職員の数です。フルオート化れた施設にもかかわらず、第一タービン室の職員の数が多すぎるんです」

新田が指し示す、ダム職員の数は二十人あまり。人員削減のためのフルオート化が聞いて呆れる人数だ。

「しかも、警察の報告だと、職員はいまだ保護されていないそうです。テロリストの進入経路の謎。それに、消えた二十人の職員」

「確かに妙ね」

「更に謎があります。現物を見たわけじゃないから、なんともいえないですけど……」

そう言うと、新田は画面の一部を拡大する。拡大画像に映るのは、火浦たちがダム施設に持ち込んだという、箱型の爆弾だ。

「この時限爆弾。確かに、破壊力の強いTNT時限爆弾なんですけど、東西区画に設置された、たった八個の爆弾だけでは、ダムを破壊することなんてできません。彼らは一体何がしたかったのか？」

「茶番劇……」

不意に、何かを思い出したように、絵里南が呟く。

「え？ 何ですか、室長」

「ううん、何でもないわ。ねえ、新田くん、この映像もう少し前のものってないの？」

「このカメラ、二時間おきに画像更新するタイプでして、西東京水道局に問い合わせれば、手に入るとは思いますが、時間が掛かります。あ、でも事件の十分前までならありますよ」

「見せて！」

絵里南は、コーヒーのおかわりを貰いに来たことをすっかり忘れて、新田の隣のデスクの椅子を取り出すと、それに座って、パソコンの画面にかじりつく。

十分前の映像には、普段通りと思える、施設の作業風景が映し出されていた。「別に、変なところはありませんよ」と言う新田の言葉どおり、これといって不思議なところはない。しかし、絵里南は目ざとく、職員の数を読んだ。

「いいえ、画面に映っている職員の数が少ない。カメラの視界の外に、四、五人ほどいるはず……ほら、出てきたわ。彼らは物陰で何をしていたのかしら」

「何って、仕事じゃないですか？ ん、何か変な工具持ってますね、こいつら」

監視画像の映像のため、鮮明さに欠ける。職員たちが手にしている工具が何かはつきりとは分らないが、明らかに、ダム職員が仕事に使用する工具ではない。

「確か、錦隊長たちは、まだダムにのこってるハズよね。連絡を取ってもらえるかしら。もしかすると、爆弾は他にもあるかもしれない！」

突然、デスクを両手で強く叩き、立ち上がった絵里南に、新田は驚きを隠せなかった。

「ええっ、爆弾が？」

「あいつは、火浦は、捕まるときに『茶番劇』って、わたしに言ったのよ。あの時は意味が分からなかったけど、間違いない。逃がされた、タービン室の職員は全員「アカツキ」のメンバーよ。火浦たちの突入劇は、わたしたちを本当の爆弾から欺くための茶番だったの。本当の爆弾は、ダミーの職員たちが事前に仕掛けていたのよ。

おそらく、二十……いいえ、それ以上のTNT爆弾！」

「それってっ！」

「爆発したら、大変なことになるわ」

絵里南は新田のデスクを離れると、オフィスの中央まで歩いていき、一際大きな声で、職員全員に呼びかけた。

「みんな、ちょっと聞いてください！　これは、予測でしかありませんが、まだテロは終わっていません！　ダムが破壊されれば、ここを含めた東京中の電力が、向こう何ヶ月もストップし、国家規模の大混乱が起きます。直ちに、リスクマネジメントと、対策を講じます。迅速かつ、無駄のない行動をお願いしますっ！」

絵里南の一声に、各部署から威勢のよい返事が返ってくる。と、その時だった、バタバタという足音がエレベーターホールの方から聞こえてきたかと思うと、血相を抱えたスーツ姿の男がオフィスに走りこんできた。かなり慌てている様子で、ハゲあがった頭頂部にも、玉のような汗が浮かんでいる。

「あわわわっ、土門くん。室長の土門くんは居るかね！？」

「どうされましたか、早手^{はやて}参事官！？」

ただ事ではないと察した絵里南は、上司でもある早手参事官のもとに、駆け寄った。

「さ、先ほど、警察庁から連絡があった！　火浦を警視庁まで護送していた、護送車が何者かに襲われて、火浦たちが脱走したらしいゆ、行方が知れないとのことだ！」

参事官は、よほど慌てているのか、多少どもりながら、絵里南に言う。それを聞いた、特別危機管理対策室のオフィスは騒然となった。すべて、捜査陣をかく乱するための茶番劇。ただ、ひとつ、あの少女が、秘密兵器を穿いて現れたこと以外は、すべて予定通り。いや、もしも最悪、警察や特別危機管理室に捕まったとしても、彼らには、脱走する手立てが最初からあったということだ。そして、知らないうちに仕掛けられた爆弾は、粛々と時を刻む。

絵里南たちは、一様にその真実に気付き、くやしさに歯噛みしたが、それも空しく、オペレーターの女の子が今にも倒れそうなくらい青い顔をして叫ぶ。

「た、大変ですっ！！　西東京水道局のダムが、爆破されましたっ

！！ 錦隊長以下、隊員十五名、および警察関係者三十名の消息も不明ですっ！」

「そんなんっ、すでに手遅れだったの！？ 至急、調査チームを編成して、直ちに西東京ダムへ向わせてっ！」

焦る絵里南。その瞬間、ぱっと視界が暗転する。蛍光灯も、パソコンのバックライトも、一瞬にして消えたのだ。西東京ダムは、その豊富な水量で東京のほぼ全域の電力をカバーしている。そのダムが、破壊されれば、町中が大停電になることくらい明白だった。

「みんな、落ち着いて！ すぐに、予備電源が起動するはずです！」

暗闇の中で、絵里南は室長らしく、落ち着いた口調で叫んだ。しかし、何秒過ぎても、ビルの自家発電によって、明かりが戻ってくることはなかった。

7. 「何か、悪いことしたの？ 不良デビュー？」（後書き）

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください

8. 「わたし中学生だよ。ただの女の子だよ！」

芽衣は自分の部屋に入ると、パンツを脱いで、カーペットの上に投げ捨てた。多少、スカートのengahスーして落ち着かないけれど、そんなこと芽衣にとっては、どうだってよかった。喋るだけじゃなく、兵器が飛び出す、ありえないパンツの所為で、とんでもないことに巻き込まれてしまった。あと一步で、たった十三年の人生に幕を下ろすところだった。そんなパンツをもう穿いていたくない……。

すでに、外は夜の帳が下りはじめていた。マンションの上層階にある木本家の家、特に芽衣の部屋からは、夜景が一望できるのだが、芽衣はそんなものに目もくれず、灯りのない部屋のベッドに、顔から突っ伏した。すると、全身に疲れがまとわりついてくる。

太平洋戦争中に開発された、兵器パンツ？ 手違い？ テロリスト？ みんなを救えるのは、わたしだけ？ いろんな思いが、芽衣の頭の中をグルグルする。

朝、晴れ間を見たときには、今日一日、いい日になると思っていたのに……。怒りとも、なんともいえない感情が渦巻くのを感じつつ、芽衣はそつと顔を上げた。

カーペットの上には、先ほど脱ぎ捨てたパンツが佇んでいる。見た目は、ただの女性用下着。白と水色のシマシマのパンツだ。

「おい、小娘……」

突然、パンツが口を開いた。いや、実際には外面に口らしきものはないのだが、それまで燃料切れで静かにしていたはずのパンツが、内臓発電機による充電を完了したのか、これまでの強い口調ではなく、至って穏やかな声で芽衣を呼ぶ。

「何よ」

「スカートの裾から、可愛い尻が見えそうだぞ」

「エッチっ！！」

芽衣は、顔を真っ赤にしてスカートを引っ張った。

「冗談だ……安心しろ。どうした、ずいぶん落ち込んでいるようだ。パンツの小官でよかったら、相談に乗るぞ。貴様は、小官の装着者。つまり、我が小隊の隊員だ」

「わけのわからないこと言わないで。だいたい、あなたの所為で落ち込んでるの。ほつといてよっ！」

「ほう、小官の所為か……。いや、すまないと思っている。貴様のような民間人を巻き込んでしまったのは、軍人の名折れだ」

「分かってるんだったら、どこか行つて」

芽衣はそう言つと、スカートを押さえたまま、再び枕に顔をうずめた。ちよつとだけ息苦しい。

「なあ、小娘。小官は軍人であり兵器ゆえに、あまりこのような言葉を使いたくはないが、運命という言葉、貴様は知ってるか？」

パンツは、そんな芽衣に、変らず穏やかな口調で話しかけてくる。

「運命？」

「いかにも。貴様と出会つたのは、運命。貴様が、この国を救える唯一の人間となつてしまったのも、運命」

「だから、一緒に戦えつていうの？ 出来るわけじゃないじゃん。わたし中学生だよ。ただの女の子だよ。日本の危機とか、世界を救うとか、そういうのは漫画とか映画の中だけにしてよっ」

芽衣の声は何だか泣き出しそうだった。カーペットに投げ出されたパンツはやや溜息をつくように、芽衣を見る。

「小官を開発した男は、平凡な男だった。軍人になりたくなつたわけではない。先進技術開発の研究者だったため、半ばむりやり徴用された。彼は、そうして初めて、戦場の前線で次々と兵隊が死んでいくことを知った。戦争が残酷で、どれだけ悲しいものか知った」

「絵里南さんのお祖父ちゃんのこと？」

「そうだ。博士の祖父、つまり、小官の生みの親は、戦争を早く終わらせるために、小官を開発したんだ。持てる知識すべてを用いて、一人でも多くの兵隊と、一人でも多くの日本人を守るため。それが

ひいては、世界を救うことになると思じて……。もつとも、戦争が終わるまでに、完成しなかったが、皮肉にも小官の存在が、水瀬大佐にあらぬ野望を抱かせてしまった。それは、小官の責任だ」

「縞風さん……」

「六十五年も経って、ようやくその責任を果たすときが訪れた。そして、小官が女性用の下着と同型に作られたのは、小娘、貴様の手に渡すための『運命』だったと信じたい。だから、頼む小官とともに、水瀬の野望を打ち砕き、そして土門一之介の想いを叶えて欲しい！」

芽衣はそつと顔を上げる。しばらくの間じつと、パンツを見つめて、ふつと息を吐き出すと、芽衣は少しだけ笑った。

「あーあ、わたし、バカだバカだって、妹に言われてきたけど。やっぱり、バカなのかな。それに、パンツに頼まれごとされるなんて思ってもみなかった……。でも、痛いのはヤダ。怖いのもヤダ。だから、逃げたいと思ったら、わたしは逃げちゃうよ。それでもいいの？」

「貴様が逃げ出す前に、小官が軍人の何たるかを貴様に教えてやるう」

「物覚え悪いよ、わたし」

「出来ない隊員を育てるのも、隊長の役目。構わん」

「わたしは……日本を守るとか、世界を救うとか、そういうことができる子だなんて思ってたない。でも、お父さんやお母さん、それに優衣やかすみんを助けるためなら、あなたの責任を果たすってやつを手伝えるかもしれない」

芽衣はそう言うのと、ベッドから起き上がった。そして、パンツの傍まで行くと、それをそつと拾い上げる。優衣に「お姉ちゃんって、楽天主家だよ」と、よくいわれることを思い出し、「そうかもしれない」と一人苦笑した。

「あと、隊長はわたし」

ニッコリと微笑んだ芽衣は、ゆっくりとそのパンツを穿いた。や

はり、思ったとおり、意外と履き心地は悪くない。きっと、このフイット感も、運命なんだ。そう信じれば、喋るパンツと自分に舞い込んだ、とんでもない使命の意味も、何となく飲み下せるような気がした。

「んっ！？ 敵襲を感知っ！」

突然、サイレンのような音が、パンツから聞こえてくる。それは、敵襲を知らせる「青龍」からの警報だった。すると、それを見計らったかのようなタイミングで、部屋の窓から見える夜景が真っ暗になっっていく。遠くに見える商社ビルの明かりが消え、駅の明かりが消え、隣のマンションの明かりが消え、次々と町中の電気が消えていくのだ。

「コレは、一体どういうこと？」

芽衣は慌てた。町中が一度に大停電を起こすなんて、あり得ない。

「高高度電探『青龍』に感あり！ 間違いない、この停電は敵の仕業だっ！ 出撃するぞ、芽衣隊長！」

「う、うんっ！ でもどこから？」

「窓は開かないのか？ 『朱雀』ならゼロ距離滑走で飛行できる」

「だめ、はめ殺しになってるの……そうだ、ベランダ。隣の部屋のベランダからなら！」

そういうが早いか、芽衣は部屋のドアを乱暴に開けて、両親が寝室に使っている隣室へと飛び込んだ。

「何故、予備電源が作動しないの！？」

暗がりのオフィスで、携帯電話のバックライトを頼りに、絵里南が新田の姿を見つける。

「分かりません。今日メンテナンス会社の人が、何の異常もなかったって言ってたのに」

新田は暗闇が怖いのか、地震でもないのに、自分のデスクの下に隠れ潜んでいた。「何やってるのよ」と苦笑していると、絵里南の携帯のバックライトが、今度は大きい電球のようなものを照らし出

す。思わず、その奇妙な物体に絵里南は「きゃっ」と短く悲鳴を上げてしまった。

「何だ、土門くん、ワシの頭がお化けにでも見えたか？」

ぬつと、顔を出したのは、巨大な電球ではなく、早手参事官のハゲ頭だった。

「あ、いえ。その……し、失礼しました」

「まあ、いい。今日の朝、新製品の養毛剤をつけてきたからな。今に見ておれ、フツサフサになってみせる」

「は、はあ……フツサフサですか」

とてもじゃないけど、無残な早手の頭を診ていると、夢物語にしか絵里南には聞こえない。

「しかし、新田くん。ビル・メンテナンスの予定は、明日のはずだが？」

突然話を振られた、新田は机の下でぽかんとする。

「えっ、でも。確かに今日来ましたよ」

「ええ、わたしも業者の人と廊下ですれ違いましたよ。後で、参事官に報告のメールを送るって……」

そう口に出してみたものの、絵里南の脳裏にいやな予感が過ぎる。
「ねえ、新田くん。予備電源が作動しないってことは、このビルのセキュリティも作動していないってことよね？」

「多分……どうしました、室長？」

「まずいわっ！ 新田くん、ほかの職員を集めて。参事官っ、すぐに警察に連絡してください。彼らの目的は、きっとダムを破壊して大停電を起こすことだけじゃない」

暗がりの中でも、絵里南が焦っていることは、声音だけで分かった。新田はすばやく机の下から這い出すと、職員の名前を呼び上げながら、オフィスの中央に集めていく。一方、早手は、焦る絵里南を怪訝に思いながら、「どういうことだね？」と尋ねた。

「西東京ダムを破壊すれば、それだけで、一つのテロルとして達成されます。だから、失念していました。停電を起こしても、数時間

もたてば、政府は復旧の指示を出します。でも、その数時間の間、東京は真っ暗なんですっ」

「つまり、どういうことだ？」

察しの悪い早手は、きよんとする。

「つ、ま、りっ！　このタイミングで、メンテナンス会社を騙って、ここに侵入した者がいるとしたら、テロリストたちの、真の目的はここかも知れません。彼らの目的とって、『アカツキ』対策室でもあるわたしたちは最大の障害です。停電を起こして、復旧するまでの数時間の間に、わたしたちを排除することが、この停電の目的なんですよっ」

更に最悪なのは、武器の携帯を許可された、防衛省からの出向職員である、錦たち武装部隊が、ダムに釘付けにされ、不在となっていることだ、と絵里南は付け加えた。ようやく、早手もその事態の重さを悟って、携帯のバックライトに照らされた顔が青ざめる。

「ご明察。流石は、天才科学者・土門一之介の孫娘だ」

突然忙しない、いくつもの足音とともに、早手のものでも新田のものでもない、男の声が現れた。それが、火浦のものであることを悟った次の瞬間には、火浦が右手にしたマシンガン天井目掛けて打ち放った。銃声と職員の悲鳴がこだまする。

その威嚇射撃の眩いマズルフラッシュに照らされて、人影が浮かび上がるのを、絵里南は見逃さなかった。テロリストの数は、二十名以上。皆、瞳を赤く光らせていた。いや、正確には、全員暗がりでの活動を容易にするため、暗視スコープを着用しているのだ。赤く光っているのは、スコープのレンズだった。

「よし、特別危機管理対策室のみなさん、一箇所に集まってもらおうか！！　これから、一人ずつ死んでもらう！　すべては、新しい日本の夜明けのための、人柱だ！！」

職員たちが抵抗する術を持たないことを知った上で、恐ろしいことを言う火浦の声は、愉^{たの}しげに踊っていた。

「芽衣ちゃん……！」

祈るように、絵里南は窓の外を見る。窓の外に見える、東京のビル街は、光一つなく、星の輝く夜空だけが、美しくきらめいていた。

8 . 「わたし中学生だよ。ただの女の子だよ!」 (後書き)

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

9・「小官に秘策がある」

勢い良くベランダから飛び降りた芽衣のお尻から、ジェットノズルが現れる。ごうつと火を噴き、一気に上空へと舞い上がると、闇闇と化した街並みを見下ろすように、芽衣は鳥さながらに、空を飛んだ。ひらひらと舞い上がるスカートからは、時折、白と水色のシマシマのパンツがのぞく。

「ねえ、パンツさん。敵は、何処にいるの？　こんなに真っ暗だと探せないよっ！」

芽衣は、右手で顔に当たる風を防ぎながら、そのパンツに向って問いかけた。すると、パンツは落ち着いた様子で、

「大丈夫だ。『青龍』の示す方へ飛んでいるっ！　目的地に着いたら、探照灯『黄龍』を使用する。土恥ずかしがるな、芽衣！」

「もう、こうなったらやぶれかぶれだよっ！」

そう言いながら、芽衣は地上から、前方へと視線を移した。小高いビル群が、星空にシルエットとして浮かび上がる。それは、まるで平野にぽっかりと現れた山のようなだった。

「都心が見えてきた！　うわっ！」

ビル群を指差したその次の瞬間、芽衣の体は地上にぐいつと引つ張られる。お尻のジェットノズルが偏向したのだ。見る見るうちに地上が迫ってきたかと思うと、今度は、前方に向って飛行する。芽衣はジェットコースターが苦手な方ではないのだが、こつも体を揺さぶられては、気分が悪くなってくる。

「も、もうちょっと、優しく飛んでようっ」

「泣き言を言うなっ！　ほら、見えてきたぞ、あの建物の内部に敵がいるっ！」

芽衣の眼前に現れたのは、他よりすこし背が低いビルだった。芽衣はそのビルに心当たりがあった。

「あそこって、絵里南さんの！」

「内閣府特別危機管理対策室。小官がこの世に生まれた場所だ！
やつらめ最初から、この停電を利用して、あそこを襲うつもりだったんだ！」

「ええっ！？　じゃあ、絵里南さんたちは、もう……」

芽衣の脳裏を最悪の状況が駆け巡った。パンツはすかさず、「青龍」を使い、ビルの内部を透視する。

「内部の状況を貴様の脳に投影する。自身で確認しろ」

パンツがそう言うのと、「青龍」によって3D化された画像が、芽衣の脳へと送られ、それが、網膜の内側に映し出される。まるで、目の前にスクリーンがあつて、それを見ているようなイメージに、芽衣は驚きを隠せなかった。

「すごいっ。こんなこともできるんだ！」

「ただのパンツではないということが分かったか？　それより内部はどうなっている。このまま、多目的雷撃管『白虎』でビルの壁をぶち抜いてもいいが、それでは、中にいる者たちに危害を咥えるかもしれない」

「ちよつと待つて！」

芽衣の網膜に映し出された映像は、グリーンの線でビルの室内を形作っていた。その中に、生体反応のあるものだけを赤い線で描く。生体反応のあるもの、つまり人間の多くは部屋の中央に寄り固まっている。そして、それを取り巻くように、いくつかの動く人影。

「絵里南さんたちは、部屋の中心にいるよ。それで、テロリストの人たちは、部屋中に散らばってる。ん？　この青い線で作られた箱みたいなのは何？」

ちょうど映像のあちこち、つまりオフィスのいたるところに、青いラインで形成された、箱のようなものが見える。

「それは、危険物と思しき物体だ。まさか、TNTで、ビルごと吹き飛ばすつもりなんじゃないのか！」

「TNTって何？」

平凡な女子中学生の辞書には、その単語は記されていない。

「強力な爆薬だ。ほら、ダムでテロリストどもが仕掛けようとしていた爆弾がそれだ。TNTはその昔、潜水艦型特攻兵器にも搭載されていた。芽衣！ TNTに当たらず、博士たちにも被害を及ぼさない場所はないのか？」

「ビルの西側。たぶん、わたしが絵里南さんから話を聞いた、応接室だと思う。そこなら、爆弾も仕掛けられていないし、オフィスの端っこだから、絵里南さんたちにも、テロリストの人たちにも被害はないと思う」

「了解した！！ 零式特殊兵装二十一型パ・縞風改。これより突貫するっ！ 芽衣、舌を噛むなよっ！！」

そう言つと、パンツはお尻のノズルを一気に吹かせた。そして、絶妙のエアコントロールで、ロールを加えると、そのまま風を切つてビルの真横に旋回する。そして、ビルの壁に激突せんばかりの勢いで突撃すると同時に、芽衣にスカートをめくらせた。

流石に、スカートをめくるといふ好意は恥ずかしいのだが、「白虎」からミサイルを発射するためには、いたしかたない。

「九十九式貫通弾、一番、二番、発射っ！！」

パンツの掛け声とともに、芽衣の腰の辺りに現れた箱から、ボールペン大のミサイルが射出される。そして、派手な音を立てて、ビルの壁を打ち抜いた。白煙とともにそこには、ぽっかりと穴が開く。ビル内部では、火浦たちが、血相を抱えていた。予想だにしない場所から、予想だにしない攻撃。ガラス張りの応接室の壁が破れ、派手にガラスが飛び散ったかと思うと、ぽっかりと開いた穴から、白煙をまとい降り立ったのは、白と水色のシマシマのパンツを穿いた一人の少女だった。それは、ダムの時と状況が似ていた。

「芽衣ちゃん！」

オフィスの中央に集まっている人たちの中から、一際大きな声をあげたのは絵里南だった。来てくれると信じていた、かすかに暗がりでは確認できる絵里南の顔には、そう書いてあるような気がした。

「動くな、小娘っ！！」

火浦たちは、予期せぬ救世主の出現に、うろたえながらも、さすがマシンガンを構える。彼らの背後では、真つ暗なオフィスに不気味な赤いデジタル表示が浮かぶ。まだ作動していないようだが、タイマーのセット時間は一分。もし、タイマー作動したら、解体も脱出も間に合わない。

「ガキが、二度も俺たちの意表をついてくれるとは……。だが、そのパンツを脱いでこっちに寄越すなら、命までは奪わないでやろう。もしも、抵抗するというなら、ガキといえども容赦はしないぞ!」
「セクハラっ!! テロリストのおじさんは、この小説を『R18』にするつもりなの?」

芽衣が声を張り上げる。本当はかなり怖いはずなのに、何故か全然震えたりしない。むしろ、アドレナリン全開といった風に、心が熱く燃えていた。

「フンッ。ガキの尻になんぞ、興味はねえっ! さっさと脱ぐんだ」
火浦はそう言うのと、マシンガンのトリガーに指をかけた。その、銃口から発射される毎秒三十発の弾丸は、間違いなく、芽衣の体を貫くだろう。いくら、対テロ秘密兵器の装着者といえども、ただの少女にすぎない。一発でも弾丸が当たれば、致命傷になるほど脆弱で貧弱な体なのだ。

「ホントに、興味ないかどうか、試してあげるっ!!」
と、突然に芽衣はそう言うのと、恥も外聞もかなくなり捨てて、スカートをまくりあげた。暗闇に浮かぶのは、白と水色の女子用パンツ。意表を突かれた、テロリストたちは、少女の大胆な行動に驚き、ざわついた。

だが、火浦だけは、冷静な顔をしたままだ。

「また、催涙弾を撃つつもりか? ここで、催涙弾を使えば、そこにいる特別危機管理対策室の連中も、被害を被るぞ。他の弾丸でも同様だ。壁に穴を開けたミサイルを使えば、TNTに引火して、お前も俺たちも、みんなもろとも木っ端微塵だ」

事前に、芽衣がパンツから聞いた、『白虎』に搭載されている爆

弾は、全部で四種類。一つは、壁を打ち抜いたミサイル。もう一つは、催涙ガスを混入させた煙幕弾。残る二つは、投下型爆雷と魚雷。後者二つは、明らかにこの場所に適さない。そして、火浦の言うとおり、ミサイルと煙幕弾をここで使えば、絵里南たちにも被害が及ぶ。最悪、自分も吹き飛ばされてしまう。

「つまり、お前に与えられた選択肢はふたつ。ここでパンツを脱いで、大人しくお家に帰るか、それともマシンガンで蜂の巣にされて死ぬか、どちらかだ」

一瞬だけ、暗視スコープの赤いレンズが、ニヤリ、と笑ったような気がした。もちろん、それは芽衣とパンツの気のせいだが、まるで絵本に登場する鬼の瞳のようなそれは、あまりにも不気味すぎる。芽衣は、今更になって何の作戦もなく、ここに飛び込んできてしまったことを後悔した。怖くなったら逃げるかもしれない、そうパンツに宣言したものの、男の人の前で恥を忍んでパンツを脱いでも、助かる保証はないし、ここで逃げたらきつと後悔する。それだけはイヤだ。

どうしたらいい……？

「芽衣！ 臆するなと言っただろう！ 軍人たるもの、敵を前にして怯えれば、それは負けたも同然！ 必勝の信念を貫けっ」

それは、まるで意気消沈しかけた芽衣を奮い立たせるかのようだった。パンツは、高らかに声を張り上げる。

「でも、どうしたらいいの？」

「案ずるな、芽衣！ 小官に秘策がある……」

9・「小官に秘策がある」(後書き)

次で最終回です。ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

10. 「わたし、お嫁にいけないっ!!」

「動ける者は、怪我人の救助を優先しろ！」

阿鼻叫喚あびきょうかんの地獄絵図と化したダムに、錦の声が響き渡る。ダム施設が、轟音とともに爆発したのは、数十分のこと。施設内部から膨れ上がった熱は、瞬くうちに破裂して、錦や隊員、それに警備に当たっていた警察官を吹き飛ばした。おかげで、部下の叫び声が鼓膜を叩くまで、錦は気を失っていた。起き上がった彼の視線の先には、ごうごうと音を立てて燃え上がる炎と黒煙。だが、呆気にとられている場合ではない。尋常ならざる事態が起きたことを察した錦は、部下たちに次々と指示を送った。

幸いだったのは、施設が破壊されただけで、ダムが決壊したりしなかったことと、隊員にも警察関係者にも、死者がなかったことである。それでも、大量のTNT爆薬の破壊力は凄まじく、怪我人が続出していた。

「この俺が、火浦を甘く見積もっていたということか？」

戦場さながらの光景に、錦は拳を握り締める。すると、そんな錦の姿を見つけた隊員の一人が、駆け寄ってきた。

「十分ほど前に、警察から情報提供があったのですが、兵器密売組織が、輸入した大量のTNTが『アカツキ』に流れたという証拠が拳がったそうで」

「今更、そんな情報が何の役に立つ？ ヤツラのバックボーンには、水瀬の私有財産がついている。最悪、核爆弾だって手に入れられるほどの個人資産だ。TNTの一トンや二トン、簡単に手に入れられるだろうよ？ そんな古い情報をくれたヤツに、この惨状を見せてやりたい。とにかく、本部に連絡。おそらく東京は大停電で混乱している。テロリストたちに、これ以上高笑いさせるわけにはいかない。すぐに、部隊を立て直せ」

「そ、それが……先ほどから、本部と通信を試みているのですが、

応答がないんです」

隊員は、困ったような顔をしながら、黒バンの方に目をやった。ここからでは見えないが、中では隊員が必死に「応答願います」と繰り返ししていた。

「何故だ？ 本部は予備電源が作動しているはずだ……」

と言いかけた、錦のこめかみを冷たい汗がタラリと流れ落ちた。イヤな予感是一直に当たったもの。そういうジンクスを信じているわけではないが、錦の悪い予感は当たっていることを、彼らは知らない。

「非常事態だ。対策レベルを、マニュアルSに移項。怪我人は救急隊に預け、怪我のないものは武装して直ちに本部へ帰投するっ！！」

錦は、厳しい顔つきで叫んだ。

「しかしっ、テロはコレで終わりでは？」

「回りくどい兇戯ほど、派手で迷惑なことはない。ダムの爆破も、大停電もただのパフォーマンスだ。彼らの本当の目的は、対策室の襲撃かもしれない！」

錦たちが、ダムから引き返している頃、特別危機管理対策室を救うため突撃した芽衣は、テロリストに囲まれていた。ミサイルも催涙弾も使えない。それは、同時に生命の危機でもあった。昨日までいや今朝までこんなことに巻き込まれるとは思っても見なかった芽衣にとっては、この上ない大ピンチだった。

しかし、肝心のパンツは落ち着いた声で「秘策がある」と言った。それが何なのか、芽衣には分からない。

「おい、お嬢ちゃん。いつまで、パンツを見せてくれるんだい？」
テロリストの一人が、暗視スコープの下に覗く口元をニヤニヤとやらしく曲げる。芽衣は、自分がスカートを捲り上げたままであったことを思い出して、カーツと顔が熱くなった。

周囲に灯りがないおかげで、夜闇につつまれ、絵里南たちには芽衣のパンツをさらした姿が良く見えないだろう。しかし、テロリス

トたちは、赤外線暗視スコープを着用している。真つ暗闇でも、芽衣のパンツがくつきりと見えているはずだ。

「いやあんっ！ み、見ないでようっ」

「へへっ、見せてるのは、お嬢ちゃんじゃないか。俺は、大人の女より、お嬢ちゃんのような可愛い女の子の方が好きなのさ」

明らかに、キケンな声音で、テロリストの男はそう言つと、じりじりと、芽衣に歩み寄ってくる。火浦たち、他のテロリストたちはその光景を、笑いながら眺めるだけ。

「^{このやま}殿山は、ロリコンだからな。あーあ、かわいそうに」

「やっちまえ、やっちまえ」

どうやら、部屋に仕掛けた爆弾を爆発させる前に、突然訪れた余興を楽しもうというつもりらしい。

「ちよつと、来ないで、変態っ！ ホンットに『R18』になつちやうよう！」

「変態とは、ひどいじゃないか。オジさん傷つくなあ。それに、オジさん『R18』大歓迎。オジさんと、あんなことやこんなことして、遊ぼうぜえ」

語尾に、音符マークでもつきそうな勢いだ。この人、マジで変態だ！ と芽衣は背筋も凍りつくほどの悪寒を覚えてしまう。

「油断したな、バカものどもめっ！！」

芽衣の体に、変態テロリストの指先が触れそうになったその瞬間、突然パンツが叫ぶ。

「探照灯『黄龍』起動！ 最大出力で照射っ！！」

パンツのクロッチ（股布）部分が俄かに開閉し、懐中電灯のようなものが、横に並んで二つ出現する。それらは、まるで、カメラのフラッシュのように強い光を発した。本来、二キロ先まで照らすことができる強力な探照灯であり、赤外線暗視スコープを着用したテロリストたちの視界は、一瞬で真つ白になる。

「ぐあっ！ 全員、暗視スコープを外せっ！！」

火浦はそう叫びながら、自らも暗視スコープを投げ捨てた。

「小官を侮ってもらっては困るな。小官は、帝国陸軍きつての兵器開発者、土門一之介が平和への祈りを込めて開発し、そして六十五年の月日を経て、その孫娘である土門絵里南博士がこの国に住む者たちを守る要として完成させた、『国防の城壁』『護国の砦』！装備された武装は、多目的雷撃管だけではないっ！！」

パンツは高らかに宣言すると、「黄龍」の出現したクロツチよりすこし上部から、筒が現れ、三段階に伸張する。パンツ型秘密兵器、縞風改の主力武装「玄武」である。口径は、ピストルよりも少し大きく、バレルの長さは、主砲と呼ぶに相応しい長さだ。

だが、股間のあたりから伸びた主砲塔を目の当たりにした芽衣は、顔を真っ赤に染め上げた。

「ちよっ、ちよっ、ちよっ！ これって、男の子の……！！」

砲塔の下にある、並列する二つのライトと、そのいきりたつ……いや、そりたつ……いや、猛々しい？ 主砲の位置関係は、女の子にはない、男の子特有のソレように見える。これでは、さすがの芽衣も楽天家ではいられない。

恥ずかしさが血管を沸騰させて熱となり、頭の直上まで登りつめた芽衣は、まるで火にかけられたヤカンが笛を鳴らすような気分だ。「いやあっ！ 何コレっ、何なのコレっ！！」

「多弾頭主砲『玄武』、小官最大の武器だっ！ だから、恥ずかしがるなと、言っただろう！！」

「無理っ、無理無理っ、無理ですーっ！！ だって、コレ男の子の……っ！」

「それ以上、具体名を出したら、本当に『R18』になってしまうぞっ！！」

「でも、でもでもでもっ。わたし、胸もぺったんこだし、くびれもないケド、女の子ですからーっ！」

「文句なら、土門博士に言えっ！ 今は、目の前の敵に集中しろっ！ 零式特殊兵装二十一型パ・縞風改、敵を駆逐するっ！！ 主砲特殊弾、発射っ！！」

恥ずかしがって、イヤイヤをする芽衣を他所に、パンツの掛け声がオフィスに響き渡ると、いきりたつ……いや、そりたつ……いや、猛々しい？（もう、それはいいって！ B y 芽衣）主砲の先端、砲口から、白い弾丸が発射された。大きさは太目のマジックペンぐらいだろうか、弾丸の身にはアルファベットで「ESB」と書かれている。

まず最初に弾丸が当たったのは、変態テロリストの烙印を押された男だ。着弾と同時に、一瞬バチツという音がしたかと思うと、男は「きゅっ」と悲鳴を上げてその場に昏倒する。

それを見た絵里南は、慌てて傍にいた、新田と早手参事官の頭を押さえつけた。

エレクトロカル・ショックド・バレット

「電磁衝撃弾よっ！！ みんな、流れ弾に当たらないように、伏せてっ！！」

主砲からは、次々と白い弾丸が発射される。そして、瞬くうちにテロリストたちを百発百中で狙い撃ちにし、一人また一人と、電撃を浴びて気を失った。それがパンツの言った「秘策」だったのだが、芽衣は、自分の股間から伸びた主砲から、弾丸が飛び出すたびに、「もう、ホントにお嫁にいけないあいつ！ ふあーんっ」

と、真っ赤になりながら、悲鳴を上げた。年頃の少女にとって、今日一番の、最悪な出来事は、きっとこの瞬間だったのだろう……。

六十五年ほど前、一人の男が、戦争の悲惨さを目の当たりにして、戦争を早く終わらせるため、一枚の兵器の設計図を描いた。それは、シマシマ柄の女性用下着に内包された、五つの武装を使いこなし、単機で千機の攻撃力を備えた万能兵器だった。

何故、彼がそのような兵器を女性用下着型にしたのか。それには、孫娘も、装着者となってしまった少女も、パンツ自身も知らない、開発者のもう一つの願いが込められていた。

「戦争が終わり、この国を新しく再建するのは、男だけの力では不可能だ。女性が強く、この国を率いていかなければならない。その、

象徴と先駆けの意味を、この新兵器に託したい。だから、こいつは、女性用のパンツ型でなければならない」

無論、その思いを、男は生前の間に、語ったことは一度もない。

だが、六十五年が過ぎて、この国に再び危機の暗雲が立ち込めた。それは、内なる悪意というべき、テロリストの存在だ。平和に暮らすこの国の人たちの命を脅かしても、自分たちの理想をかなえようとする。それが正しいことか否かは別として、無為に失われていい命など存在しない。

その命を、テロリストから守るため、六十五年の月日を経て、現代技術によりついに誕生したのが、編風改である。そして何の因果か、それは、一人の少女の手元に渡った。

かつて、そのパンツの開発者が願ったように……。

錦たちが、特別危機管理対策室に帰還した時には、すべてが終わっていた。テロリストは一人残らず、目が眩んでいる隙に、電磁衝撃弾を浴びせかけられて、だらしなく床に転がり、手錠に繋がれていた。何があったのか、察するまでもない、部屋の隅っこで「お嫁にいけない」とぼやく少女が、パンツの力を借りて、絵里南たちの危機を救ったのだ。

すぐさま、新田が予備電源を復旧し、TNT爆弾の信管を解体。テロリストたちは、警察に連行され、日付が変わる頃には、オフィスに安堵の息が漏れていた。

一方、芽衣のパンツは、テロリストをやつつけるなり、燃料切れですやすやと眠っている。静かになったのはいいのだが、あまりの恥ずかしさと衝撃に、放心状態の芽衣に、絵里南は優しくブランケットをかけてくれた。

「ありがとう、芽衣ちゃん。でも、きつと来てくれるって、信じていたわよ。わたしには、あなたが女神にみえたわ」

そう言って、絵里南は、芽衣にコーヒーをご馳走してくれた。コーヒーを飲めば、その香ばしい香りと苦味で、ようやく心が落ち着

いてきた。

「そんな、わたしは何も。全部、パンツさんがやってくれたことですから」

「そう？　だけど、この場合、謙遜は美德じゃないわ。縞風改を、きちんと使いこなすには、縞風改の人工知能と信頼がなければ無理よ。あなたは、縞風に認められ、あなたも、縞風を認めている。だから、テロリストをやっつけることが出来たの」

「認めてるつもりはないです……。ただ、パンツさんに頼まれたんです。自分の責任を果たすのを手伝って欲しいって。わたし、何するのダメな子だから、誰かに本気で必要とされたことがなくて……」

芽衣が、言葉尻に詰まると、絵里南はニツコリと微笑んで、うん、と納得したように頷く。

「やっぱり、わたしの目に狂いはなかったわ。あなたの瞳を初めて見たとき、直感があつたの。誰かを守りたい、そう思うことが出来る、強い女の子だって」

「強いなんて……」

といいかけて、また謙遜は美德じゃない、といわれそんな気がした芽衣は口を閉じた。すると、絵里南はそんな芽衣の手をとって、
「ねえ、芽衣ちゃん。もう一度お願いするわ。火浦ひとりをやっつけたところで、水瀬の率いる『アカツキ』が活動をやめることはない。第二、第三のテロがこの先も起きるかもしれない。みんなを守るため、わたしたちと一緒に戦って」

と、真剣な顔をする。

芽衣はすぐには答えられず、しばらく考えるように、スカートに目を落とした。多分、怖いからといって、逃げ出すつもりもない。もうすでに、答えは決まってるも同然だった。

「わたしで、お役に立ちますか？」

「ええ、もちろん。最大限のサポートはさせてもらうわ。わたしたちは、内閣府特別危機管理対策部ですもの。それに、そのパンツを

穿くのは、もともとわたしだったの」

「えっ？」

絵里南の突然の発言に驚く芽衣に、「まあ、シマパンなんて、ちよつと子どもっぽいデザインかなとは、思ってたけど」と、絵里南は舌をちろつとだして、恥ずかしそうに笑った。

翌日、芽衣は見事に寝坊した。

目を覚ましたときには、すでにお昼をまわっており、枕もとの携帯電話には、親友のかすみんから、何通ものメールが届いていた。もはや、遅刻では済まされない。と、同時に、懲罰もトイレ掃除だけでは済まされそうにないと、芽衣は真っ青になる。

「何で誰も起こしてくれなかったの!？」

慌てた芽衣は、自分が制服のまま眠ったことも忘れて、布団を跳ね除けて、リビングに駆け込んだ。すると、リビングに入るなり、巨大なダンボール箱に鼻をぶつける。見れば、リビング中に「白イヌ宅配便」と描かれた大小のダンボールが置かれている。

「おはよう、芽衣ちゃん。お母さまなら、さっきお買い物に出かけられたわよ」

ダンボールの影から、ひょっこり顔を出したのは、私服の絵里南だった。どうやら、リビングを占領する荷物は、すべて絵里南のものらしい。

「そんなことより、絵里南さんが、どうして、我が家にいるの!？」

「さて、どうしてでしょう？」

ニツと白い歯を見せながら、絵里南は悪戯っぽく笑う。

「ほら、サポートするって言っても、警護の兵隊をこのマンションに配置するわけには行かないじゃない。だから、わたしが、お隣に引っ越すことにしたの。で、とりあえず、荷物が多すぎて入りきらない分を、お母さまにお願いして、ちよつとおかせてもらってるのよ」

「は、はあ……そうですか」

「ただいま。あ、サボリ発見!」

玄関の方から、声が聞こえたかと思うと、とつとつと、とりズミカルな足音とともに、小学校から帰宅した妹の優衣が駆け寄ってくる。

「あら、お帰りなさい、優衣ちゃん」

「ただいま、絵里南お姉ちゃん」

と言う、妹のぶりっ子モードと、いきなり隣室に引越してくるという絵里南の大胆な行動に、芽衣は呆氣にとられてぼかんとしてしまう。

その時だった、絵里南の携帯電話が、けたたましくベルを鳴らす。

「はい、土門です。はい……はい」

だんだんと、絵里南の表情が曇る。

「はい……えっ！？ 国際指名手配の金沢恵がかなざわめぐみアメリカから帰ってきた？ それ、本当なの？ はい……はい、分かりました、すぐに

準備します。有事の場合に備えて、錦隊長たちにスタンバイするよう伝えておいてください！」

その声色は、内閣府特別危機管理対策部室長の威厳に満ちた声だった。

「指名手配って、まさか」

「そうよ芽衣ちゃん。金沢は火浦と同じく『アカツキ』の構成員。火浦よりも狡猾な、女テロリストよ」

と、その時、まるでタイミングを見計らったかのように、芽衣のスカートの中から、サイレンのような警告音が鳴り響く。そういえば、パンツも穿いたままだった、と芽衣は思い出す。

「敵襲を確認！ 芽衣っ、直ちに出撃だっ！」

今までスリープモードだった、パンツが充電を完了し、意気揚々と声を張り上げた。それに驚いたのは、事情が良く飲み込めていなかった、妹の優衣だった。

「ぱ、ぱぱ、パンツが、お姉ちゃんのパンツが喋ったっ！！」

あわわ、と必要以上の驚きを全身で現す優衣に、芽衣はニヤリと笑った。いつも、目の上のたんこぶ的存在の芽衣に一泡拭かせるチ

ヤンスだ。

「そうよ、わたしのパンツは、魔法のパンツなの。今夜あたり、優衣に魔法をかけて、呪っちゃうかもよ」

「きゃ、きゃーっ、お姉ちゃんの意地悪っ!!」

優衣は飛んで逃げると、自分の部屋へと走りこみ、閉じこもってしまった。

「何をバカなことをやっている！ 敵が現れたんだぞ、ぐずぐずしている余裕はない！」

妹の姿にクスクスと笑う芽衣を、パンツは叱責する。

「分かってるわよ。もー、せっかちなパンツだなあ。っていうか、昨日言ったよね、わたしが隊長だって」

「その部分に関しては、承服しかねる！」

「何よう、ケチ！」

「ケチで結構。小官は軍人だからなっ！」

パンツと言い合いする、芽衣の姿に、今度は絵里南がクスクスと笑う番だった。

「あなたたち、いいコンビかもしれないわね……。とにかく、わたしも錦隊長たちとすぐに駆けつけるわ。くれぐれも気をつけて」

絵里南はそう言っていると、芽衣の肩をポンと軽く叩いた。芽衣は強く頷いたから、リビングからベランダへと出た。

「さっさと、テロリストさんをやって、お風呂に入りたい」

「お前次第だ。いくぞ、芽衣っ！ 噴進機『朱雀』起動っ！」

春の風が、芽衣のスカートを舞い上げる。そこからちらりと覗いた、白と水色のシマパンの可愛いお尻から、ジェットノズルが現れたかと思うと、ごうつと火を吹き上げる。

「零式特殊兵装二十一型パ・縞風改、出撃するっ!!」

「やっぱり、お尻から火が出るなんて、恥ずかしいよっ！ やっぱり、わたし、お嫁にいけないっ!!」

悲鳴を上げる芽衣はパンツとともに、絵里南に見送られて、空に飛び立った。

(つづく……のかな?)

あとがき……のようなもの。

はじめまして&こんにちわ。

この度は、拙作「わたパン！」を読んでいただき、誠にありがとうございました。また、終始「パンツ」を羅列して、不快感を与えてしまったことを深くお詫びいたします。あと、ホントに冗談で書いた、ネタ小説なので、真面目に受け取らないでくださいっ！

ここから先は、ネタバレも含みますので、もし、よろしければ、本編を読んでから、この「あとがき」を読んでいただけると、ありがたいです。（R15なので、十五歳未満の方は、ごめんなさい）

もともと、この小説は、前書きにも書いたとおり、わたしが原作ではありません。知人の古山瞬先生が、考えた物語に、少しだけわたしなりのエッセンスを加えたものです。

物語のコンセプトは、ずばり「喋る女の子用パンツ」です。何故パンツが喋るのか？ そもそも、なんでパンツが題材なのかは、わたしに聞かないでください。（古山先生に聞いてください）

もともと、古山先生の前案では「魔法のパンツ」によるラブコメ路線の小説だったのですが、わたしが勝手に「パンツ兵器」によるよく分からない小説に、変更しました。

何ゆえ、「魔法のパンツ」を「パンツ兵器」に変えたのかと言いますと、「パンツ」という単語を書くのが、恥ずかしくて、カムフラージュするためです。ぜんぜんその効果はありませんでしたけど、ちなみに、作中、芽衣のパンツが白と水色のシマパンなのは、古山先生のリクエストでして、わたしとしては、何でも良かったんですが。そんなに、パンツに造詣深くないですから。

ところで、シマパンって流行なんでしょうか？

全体を通して、本当に、ヒロインの芽衣が不憫で仕方がなかったです。特に、ラストの「玄武」の下りは、下品なシモネタで、芽衣が憐れでした。おかげで、個人的に一番お気に入りの主人公です。

いや、まさかわたしが「R15」の小説を書く日が来ようとは思っても見ませんでした。ずっと、パンツって単語ばかり書いていたような気がします。一生分のパンツを書きましたね。十日間、恥ずかしさに耐えながら、内容的に大丈夫なのか？ 怒られやまいかと、一行書くたびに、戦々恐々としていました。今までで一番、心理的ストレスの溜まった物語でした。その割りに、悪乗りしているのは、気のせいですよ。

一応、「つづく……」のかな？」としているように、この後のストーリーも、原作者に断りなく勝手に、妄想しました。

パンツとマジ喧嘩して仲間割れしてみたり、アメリカからライバルの女の子がやってきて、その子もパンツ兵器の装着者で、芽衣とパンツバトル……じゃないや、空中戦を繰り広げる、とか。

いや、書きません。もう、書けません。パンツという言葉を、「小説家になろう」では二度と書きません。身の丈にあわない小説を書くことの罪を、深く反省してます。

今回は、ちゃんと自分の小説に取り組みます。一生懸命書いていく所存ですので、どうか見放さないください。ああ、そんな冷たい目で見ないでくださいませっ！ ホントに次回は雪宮オリジナルの小説を書きますっ！

何はともあれ、ご意見・ツッコミなどございましたら、いつまでも受け付けていますので、是非コメントをお寄せいただければ、幸いです。よろしくお願いします。

最後にもう一度、本作をお読みいただき、本当にありがとうございました。

本来の形の「わたパン」は、きっと古山瞬先生が近々書いてくれるそうです。きっと、そちらの方が、素晴らしい小説だと思います。とりあえず、今回はこの辺で、失礼いたします。では、また皆様にお会いできることを願いつつ……。

雪宮鉄馬 2010/10

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1018o/>

わたパン！

2010年10月12日01時55分発行